誰謂硯海小也其水瀰漫千里
無際矣
芳流堂主人
雅俗對照
和漢乃文典

はしがき

我が國の雅言でなければならぬとて、人力車夫の娘に、「わらはの父はをか舟のかこにて侍るよと書かせたり、或は、漢文流で無れば學力が附かぬとて、「萬小間物品々」の看板を、バン、ウケン、ブッピンと音讀させたり、或は又、西洋的が善いとて、「地球は獨樂の物の廻ること程左樣に早くさうして運轉しつゝある」と直譯させ、我こゝなぞする心醉者頑固輩が、まだ中等教育の任に、往々當つてゐる。今一歩進んだ論者は、言文一致を實行するが文明的である、「假名ずかいわをでもいゝ分りさへすりやあいゝんだ」といふやうな文を書いて、威張つてゐる。

なんと、これ等の論者に、任しておいて善からうか。果して然らば、我が國學問界の前途も、思ひやらるゝであらう。

抑々言文一致は眞理である。動かすべからざる議論である。されど、其の言文一致は、何でも多勢の人に從はねばならぬとて、東京の下等社會が言ふのを標準として、これで善からうか。否々決してさうではあるまい。

眞正の言文一致といふものは、四千餘萬の同胞が使ふ言葉の中で、最も正しいものを標準として、賤しい言葉も、拙い訛りも、その方へ進まするのである。然らば、其の正しいとは何ういふものかと云ふに、古へから、自然に、規則的に、成り立つて來た秩序ある言葉を、採用するのである。例へば、東京人は、「何某は左樣なことはしまい」と言ふけれど、關西の人は、「何某は左樣なことはすまい」と言ふ。又、大抵の地方は、受ければ捨てればなど話せど、九州の者は、受くれば捨つれば と話す。今この二つを比べて見るに、すまい受くれば捨つれば は、昔からの規則的に適つてゐるから、之を標準語とするやうなものである。これ余が此の書を著した理由の主眼である。

一假名遣も、矢張昔からの規則に、成るたけ適ふやうにせねば、何が何か更に分らぬやうな不都合を來すであらう。故に、西洋各國でも、綴字法は現今の發音に拘らず、可成古來の習慣を守つてゐる。例へば、(son=息子 sun=太陽) (some=若干 sum=總計) (you=汝 ewe=雌羊) は、同發音であるけれど、確くその綴りを守り、(light=光 mountain=山) の gh 及び a は、其の音更に響かぬけれど、矢張昔からの通りに、入れて書いてゐるやうなものである。併し、彼の地でも、此の頃は、この響かぬやうな音は、改めねばならぬといふ說も、起つてゐるけれど、輿論一致せぬ中は、區々思ひ〳〵に書くやうな不規律はやらぬ。これ誠に羨ましい美風である。

一漢文典を、同時に說いたのは、古來漢語が我が國の言葉と、密接な關係をもつてゐるからでもあるし、又文部省が、和漢文を一科目としてゐらるゝからでもある。然れど、國家一致して、意標文字を廢棄する曉に至らば、余も亦漢文の章だけは、喜んで、此の書から除くであらう。

一漢文典の章を、國文典の章に比ぶれば、非常に少ないでは無いか、といふ誹りも起らうが、これは、道理が一つに歸する所を省いたからである。

一書中に用ゐた名目や分類が、人のに、大いに違ふ處が往々ある。例へば、上二段活・下二段活を、伊宇段活・衣宇段活とし、單文・複文・重文・混文の四つを唯單に、單純文・複合文の二つに改めたやうな點である。これは、先輩の附けられた名が、矛盾的であつたり、或は、和漢文に不必要な西洋直譯的であつたりするからである。殊更に、奇を好んだ譯では無い。

一書中の文章などに、甚だ拙い處が、澤山あらうけれど、著者敢て小成に安じない積

りなれば、それ等のことは、追々に訂正しよう。

一漢字假名遣の記憶便法は、著者幼い時、大森惟中といふ先生に教はつたのに、余は又意見を加へて書いたのである。これは、餘り他の書に恐らくあるまいから、初學者注意して讀んで貰ひたい。

一この書を版にせぬ前に、反覆丁寧に見通して、色々注意をしたり、或は批評したり、或は正したりしてくれられたのは、余が長友山根勇藏君といふ方で、實に感謝に堪へぬのである。されど、余は徃々頑固にも、君が意に從はなんだ處もあるから、長所は全く君の力で、短所は固より余が責任とせねばならぬ。

時維明治三十五年十月廿三日の晩

あやに賢きあやに尊き我が　天皇陛下が

古への文みるたびに思ふかな己がをさむる國はいかにと

と、言文一致の御模範を御示させたまへるに感泣しつゝ、

草莽之臣　藤原の左近謹んで識す。

雅俗對照 和漢の文典目錄

總論……一
音韻
聲音韻……五
母韻父音子音……六
鼻音……七
清音濁音半濁音……同
五十音伊呂波……同
片假名及平假名の圖……八
本濁音連濁音……九
直音拗音……一二
約音……一三
延音……一七
略音……二〇
音通……二六
音便……三六
連聲……五一
練習問題一……五五
文字
意標文字と音標文字……五八
變体假名……五九
合畧文字……六〇
長韻符……同
送字……六一
萬葉假名……同
意標文字……六三
音訓……六四

漢音呉音唐音……六五
漢字の數……六六
漢字の書体……六七
漢字の送字……六九
練習問題二……同
假名遣
國語假名遣……七二
漢字假名遣……八三
練習問題三……九八
國語品性の總論……一〇一
漢文品性の總論……一〇七
練習問題四……一一三
國語品性の各論
動詞の活用……一一七
動詞活例……一二九
動詞の法……一九三
形容詞の法……二〇一
練習問題五……二〇三
動詞の二大別……二〇五
動作の態……二〇七
動詞の呼……二一〇
助動詞……二一一
助動詞と他語との接續……二一五
助動詞の意義……二一六
助辭……二二七
助辭の例解……二二八
助辭と他語との附屬表……二五六
接辭の分類……二五七

熟語形容詞……二五八
轉來副詞……同
練習問題六……二六〇
文章論
文の構造……二六五
文の成分……二六七
意義上の文の成分……二六九
文の種類……二七〇
單純文と複合文との規則……二七三
正述法……二七四
反轉法……二七五
省略法……二七七
形容詞法……二七八
副詞法……二七九
係結法……二八〇
懸詞法……二八六
枕詞と序詞……二八七
上下呼應……二八九
文の解剖……二九一
結論……二九二
練習問題七……二九三
漢文品性の各論
名詞代名詞……二九九
熟語形容詞……同
漢文動詞の二大別……三〇〇
漢文助働詞……三〇二
挿入詞……三〇四
助語……三〇四

目錄

文章論
漢文諸品詞の位置の規則……三〇六
漢文法の特別……三〇七
漢文の反轉法及省略法……三〇八
結論……三〇九
練習問題八……三一一

雅俗對照和漢の文典目錄 終

總論

雅俗對照和漢の文典

總論

糸左近著

地文學者の、考ふるところに依れば、「我が本洲と北海道との間は、今は、洋々たる大海で、只、寒潮の波が、縱いまゝに、岸を洗ふを見れど、ろが數千年の昔は、漠々たる平野で、其の中に、幾らかの人が、腹皷をたゝいて、居たであらう。」と、されば、又これと反對に、漫々たる大海原で、あつた處も、今は、唯、麥の浪が、舊時の面影を、殘すに止る土地も、澤山あるであらう。斯樣に、月日と共に、物の變遷するのは、地理ばかりではなくて、言葉の上には、尙更である。

地續きの昔は、睦まじく話をして、樂んだ民も、今は埃乃の一種族と、なり果てゝ、夫等の人の言語を聞けば、恰も、唐人の寢言かなと、思はるゝやうなものである。又、同

と都の言葉も、年月の經つたと共に、大に變つてゐる。例へば、やむごとなき際には
あらねど、時めき給ふありけり。」と、語つたのも、今は、尊い分限では無いけれど、榮ゆ
て居らるゝお方があつたわい。」と話さねば分るまい、又、現今の人でも、文法も假名
も、知らぬやうな陸奥の百姓と、言葉遣ひも、文字も、辨まへぬやうな薩摩の獵師と
を、突然會話させるならば、何が何か、一向に分らぬ節々も多くあるであらう。され
ば古人も、

物の名は、處によりて、かはるもの、難波のあしは、伊勢のはまをぎ。

と、詠まれたのは、理りありと、言はねばならぬ。

抑古と今とに依つて、何故に言葉の變化が出來たか、又、土地が異なれば、何故に話
しが分らぬか、實に奇態なものである、然れど物の遷り變りは、偶然になるもので
はなくて、桑田の滄海となるには、其の由つてきたる、地文の道理があると同じく、
話の訛りも、言葉のひずみも、其の由つて來る、言靈の眞理がある。
倩々考へて見れば、今現に使うてゐる、我が國の言葉は、我が國固有のものばかり
ではなくて、漢語が頗る多く交り、天竺西洋のも、幾分か加はつてゐる、例へば、シヤ

ツを冠つた旦那が、奇麗な花を携へて行く。」と、いへば、其のシヤツといふ語は西
洋で、旦那は天竺、奇麗は漢、其の餘は我が國の言葉である。斯樣
に諸國の言葉が、交つた譯を尋ぬるに、彼等の國の文明は、我より先に開けてゐた
ために、其の國の學問技術を、習はねばならぬからである。
つれて、言語も亦覺ねばならぬ。學問技術の傳授を受くれば、それに
又、今を以て、古に比ぶれば、人間の思想が、大に發達してゐる。恰も小兒と、大人とに、
於るやうなものである。然れば、自然と、夫れ〴〵の思想を、顯はすところの、言葉が
生れ出て、遂に、今の姿と、なつたものである。
斯く、言葉は、年月と、智識と、交際等とに依つて、變化するが故に、交際せざる兩國の
語は、互に分らぬやうになり、遂に、薩摩的奥州流と、變ずるのである。
又、人間は便利なことを好むもので、例へば、三十年前の昔は、うす暗い行燈の下に、
細々とした生活を、送つてゐたのも、いまはランプの明るいのも足らで、瓦斯或は
電氣燈と、電氣のうれよりも、早い進歩を求めて行く。故に言葉も、亦言ひ惡い迂り
遠いことは、言ひ易い即ち音便といふことを、使ふやうになる、これ亦自然の勢で、

人は萬物の靈たる所以である。然るに、うの人の思想を顯はす言葉に代ふる文章を、固陋なる國學者は、何でも昔のが善いとて、日進の今日にも、幼稚なる古への風を、其の儘用ゐようと云ひ、頑固なる漢學者は、何處までも、隋文漢の支那的を採らうと爭ひ、又西洋心醉者は、西洋には、規則正しい綴字法文法あるをも打ち忘れ、右兩者を極端に駁して、假名遣ひは何うでも善い、漢字は廢すべしと、矛盾の論をなしてゐる。故に此の頃の文章は、てけりけむつるし的の、昔風で無ければ、漢々たる支那法か、或は假名間違ひ、文法はづれの、ことで、外國に對しても、辱しい次第である。

抑々うの國には、うの國一般に通ずるところの、規則正しい文章が、無ければならぬ、然らざれば、各々の思想を、一般の人に、書き示すことが出來ぬ、この規則正しい文章を、書く法が、即ち文典といふもので、必ず學ばねばならぬ學問である。偖我が國は前にも述べたるが如く、方々の國と交はるけれども、數千年の長い交際をしたのは支那で、うの支那の文字が、恰も我が國固有のものゝ如くになつてゐる今日に當り、只一向に、我が國の言葉遣ひのみを知つても、土百姓か職師で終るならばいざ知らず、學問界に身を立てようといふものには、是非和漢の文法を、心得て置かねばならぬ。又古代の言葉遣ひとても、これを知らざれば、古へを温ねて、今を知るといふ學問の主意に違ふと思ふ。これ雅俗對照和漢文典を講せねばならぬ譯である。恰も、地理を窮めんとするものは、先づ地文學より、入らねばならぬと同じことである。いでや、是より章を追うて、言靈の變化規則を詳しく述べよう。

音韻

聲・音・韻

聲とは、音韻の總稱で、肺臟から呼き出す空氣が、喉口の兩側に位する、聲帶といふ膜にふれて、發するものであるが、其の聲帶は、常は、恰もV字狀の孔をなして、空氣之より出入してゐるけれども、我等が聲を出さうとすれば、聲帶が張り、其の兩方の緣が、互に近寄り、各震ひ動いて、恰も琴瑟を鳴らすとき、絃が震うて、聲が出るのと、異なるところが無い、之れが唇舌口蓋及び齒牙の爲に變化を受けて、色々樣々の、靈妙な聲を出すのである。

音とは、一度聞ゐて、直樣消ゐ去る、おと」である。

韻とは、長い時間引續き聞ゆる響きである。

母韻・父音・子音

母韻とは單純な聲で、如何に長く呼び延すも、アーア「イーイ」の如く、その響きが、變ることの無いものを、いふのである。普通、アイウエオの五つを以て、母韻といふ。

父音とは、何か聲を出さうとして、發聲機關を調へた場合に、肺から出て來る空氣が、夫れを破る際に、出る響きの無い、「おと」である。故に、明かに耳に聞ゆるものではは無い、從つて、我が國には、これをあらはす文字が無いけれども、通常クスツヌフムユルウググズヅブを以て、これに當てゝゐる。

子音とは、父音と母韻と相合して、成つたものである、通常左の音を以て、子音といふ。

母韻　ア　イ　ウ　エ　オ

父音　カ　キ　ク　ケ　コ　サ　シ　ス　セ　ソ　タ　チ　ツ　テ　ト　ナ　ニ　ヌ　ネ　ノ　ハ　ヒ　フ　ヘ　ホ

子音　マ　ミ　ム　メ　モ　ヤ　イ　ユ　エ　ヨ　ラ　リ　ル　レ　ロ　ワ　ヰ　ウ　エ　ヲ

ガ　ギ　グ　ゲ　ゴ　ザ　ジ　ズ　ゼ　ゾ　ダ　ヂ　ヅ　デ　ド　バ　ビ　ブ　ベ　ボ

パ　ピ　プ　ペ　ポ

鼻音

鼻音とは、聲が口内より出ないで、鼻の孔から流れ出るものをいふ、これは、母韻とも父音とも、云ふことの出來ぬもので、即ちンの一音である。

清音・濁音・半濁音

清音とは、音が清んで濁らぬを云ひ、濁音とは、濁音に對していふものなるが、全體清濁及び半濁の解は、何れも不明了である。唯茲には、古來より用ゐ來れる名稱を、うの儘採つたのである。尚は後の圖に就いて見るが可い。

五十音・伊呂波

五十音は、其の數五十音ある。之をうの音の種類に從うて、縦横に並べたもので、伊呂波は、其の數四十七音ある所の歌である。五十音の並べ方は、中々嚴重になつてゐて、横にも縦にも、少しも其の順序をくるはすことが出來ぬ。若しも、此の順序を誤まるならば、日本語の變化する規則が、全く分らぬやうになる。偖又五十音を片假名とも云ひ、伊呂波を又平假名とも云ふ。尚は圖に作つて示さう。

片假名及び平假名の圖

片假名

	五十音即清音																濁音						半濁音		鼻音
	阿行	加行	左行	多行	奈行	波行	麻行	也行	良行	和行	我行	坐行	駄行	婆行	バ行	パ行	ン
阿列	ア(あ)	カ(か)	サ(さ)	タ(た)	ナ(な)	ハ(は)	マ(ま)	ヤ(や)	ラ(ら)	ワ(わ)	ガ	ザ	ダ	バ	パ
伊列	イ(い)	キ(き)	シ(し)	チ(ち)	ニ(に)	ヒ(ひ)	ミ(み)	イ(い)	リ(り)	井(ゐ)	ギ	ジ	ヂ	ビ	ピ
宇列	ウ(う)	ク(く)	ス(す)	ツ(つ)	ヌ(ぬ)	フ(ふ)	ム(む)	ユ(ゆ)	ル(る)	ウ(う)	グ	ズ	ヅ	ブ	プ
衣列	エ(え)	ケ(け)	セ(せ)	テ(て)	子(ね)(禾)	ヘ(へ)	メ(め)	エ(え)	レ(れ)	エ(え)	ゲ	ゼ	デ	ベ	ペ
於列	オ(お)	コ(こ)	ソ(そ)	ト(と)	ノ(の)	ホ(ほ)	モ(も)	ヨ(よ)	ロ(ろ)	ヲ(を)	ゴ	ゾ	ド	ボ	ポ

右のうち阿行のイエと、夜行のイエと又阿行のヰヱと、和行のうとの如きは、古くより混同し居れば、通じて用ゐるも妨げない。

平假名

	伊呂波即清音											濁音			半濁音		鼻音
	い	ろ	は	に	ほ	へ	と	ち	り	ぬ	る	を	わ	か	よ	た	れ	そ	つ	ね	な	ら	む	う	ゐ	の	お	く	や	ま	け	ふ	こ	え	て	あ	さ	き	ゆ	め	み	し	ゑ	ひ	も	せ	す	が	ぎ	ぐ	げ	ご	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ	だ	ぢ	づ	で	ど	ば	び	ぶ	べ	ぼ	ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ	ん

右の五十音圖に於いて、「アイウエオ」の縦の行を阿行と名づけ、「カキクケコ」の縦の行を加行と名づく、以下佐行奈行等皆これに準ず。又「アカサタナハマヤラワ」の横の列を阿列或は阿段と名づけ、「イキシチニヒミイリ井」の列を伊列或は伊段と名づく、此の外宇列衣列等皆これに倣ふ。

ガギグゲゴは、世人一般に、ガギグゲゴを以て代用し居れども、(我)わが(限)かぎりなどの如きは、がぎと、自ら異なるところあれば、區別する方が、至當であらう。併し、我が國にても、或る地方の人は、この音を用ゐぬもあり、されば、余が文章中にも、我行を代用して、おくのである。

右等の音の外に、尚ほヴを用ゐる人がある。これは、西洋のV字を、呼ぶための符號である。されど、一般に用ゐぬことなれば、今姑らく採らぬ方が善からう。

本濁音連濁音

我が國現今の言葉に、本來濁つて唱ふる音と、二言を連ねて、一言に唱ふる時、自ら濁るとの區別がある。本來濁つて唱ふるを、本濁音と稱ひ、連聲の便より濁るのを、連濁音といふ。其の例左の如し。

本濁音 本半濁音

我行 くが(陸) くぎ(釘) / あがた(縣) さぎ(鷺) / あがる(上) にぎはふ(賑) / ひざ(膝) さと(里) / あざ(痣) きと(雉) / かざる(飾) なじる(詰) / えだ(枝) すぢ(筋) / あだ(仇) ふぢ(藤) / もだへ(悶) ねぢる(捩) / さば(鯖) かび(黴) / きば(牙) とび(鳶) / こばむ(拒) なびく(靡)

婆行 ばん(麵麭) びんせつと(西洋針) しゃつぶ(帽子) べん(洋筆) こつぶ(盃) べんき びすとる(短銃) ばのらま

駄行 とど(魚名) かげ(影) まご(孫) / にぐる(逃) さまたげ(妨) うごく(動) / すず(鈴) かぜ(風) みぞ(溝) / くず(葛) あぜ(畔) なぞ(謎) / かならず(必) まぜる(混) のぞく(除) / みづ(水) うで(腕) ねど(井) / かはづ(蛙) ふで(筆) まど(窓) / うづく(疼) なでる(撫) まどふ(惑) / あぶ(虻) なべ(鍋) つぼ(壺) / しぶ(澁) かべ(壁) いぼ(疣) / とぶ(飛) すべる(辷) こぼす(覆)

巴行 すつぽん(鼈) ぱんぷ(喞筒)

等

連濁音 連半濁音

加行 やまがは(山川) のぎく(野菊) / あさがほ(朝顔) あさぎり(朝霧) ひぐれ(日暮) あかげっと(赤毛布) おはこと(大事) / すげがさ(菅笠) あをぎり(青桐) かひぐひ(貝喰) よげいこ(夜稽古) あをごけ(青苔) / のざは(野澤) かはとり(河尻) もちずき(餅好) ねぜり(根芹) おはぞん(大損) / こざくら(小櫻) げんと(源氏) うすずみ(薄墨) みづぜめ(水責) はなぞの(花園) / たけざを(竹竿) かすじる(糟汁) きりずみ(切炭) ねぜき(井堰) すみぞめ(墨染) / やまだ(山田) はなぢ(鼻血) ゆみづる(弓弦) くまで(熊手) あらど(新砥) / ひだら(干鱈) たびぢ(旅路) ひなづる(雛鶴) やまでら(山寺) ひらきど(開戸) / こめだわら(米俵) あさぢ(淺茅) ゆふづき(夕月) ひでり(旱) ひるどき(午時) / きばさみ(木鋏) こめびつ(米櫃) ほぶね(帆舟) すみべや(炭部屋) かげぼし(影干) / しろばかま(白袴) こびき(木挽) あしぶみ(足踏) でべろ(出臍) つりばり(釣堀) / おちば(落葉) かゞりび(篝火) ねぶくろ(胃嚢) うすべり(薄縁) たちば(落穂)

多行 ひとごゑ(人聲) / あまぐも(雨雲) まゆげ(眉毛)

波行 けんばく(建白) れつぴん(列品) ひんぷ(貧富) てんぺん(天變) しんぽ(進歩) / くわつぱつ(活潑) とつぴ(突飛) きつぷ(切符) かんぺき(癇癖) につぽん(日本)

等

直音・拗音

直音とは、拗音に對していふ音の分ちで、即ち、音が拗れず、又促らず、澄んで、單純に、眞直に、發するものをいふ。前の假名の圖に、示した音は、皆、直音である。拗音とは、二箇の直音を同時に呼ぶとき、出るもので、左圖に示すが如く、伊列及び宇列の音に、也行及び和行の音を附けたるが如き、音を生ずるのである。我が國、上古は、斯樣な音は、無かつたのであるけれども、漢字音を呼ぶのに、當てはむる、音標文字が、無いところから、遂に、五十音中の二字を配合して、之を記すことゝなつたのである。

いャ	○	いュ	いェ	いョ
うゥ	うヰ	○	うェ	うヲ
きャ	○	きュ	きェ	きョ
くゥ	くヰ	○	くェ	くヲ
しャ	○	しュ	しェ	しョ
すゥ	すヰ	○	すェ	すヲ
ちャ	○	ちュ	ちェ	ちョ

圖中、いきしちにひみいりゐにいの附いた拗音と、うくすつぬふむゆるうにうの附いた拗音とは、共に無いものである。この外、濁音半濁音にも、拗音あれど、これに準へて考へなば、分るであらう。

約音

つゥ	つヰ	○	つェ	つヲ
にャ	○	にュ	にェ	にョ
ぬゥ	ぬヰ	○	ぬェ	ぬヲ
ひャ	○	ひュ	ひェ	ひョ
ふゥ	ふヰ	○	ふェ	ふヲ
みャ	○	みュ	みェ	みョ
むゥ	むヰ	○	むェ	むヲ
いャ	○	いュ	いェ	いョ
ゆゥ	ゆヰ	○	ゆェ	ゆヲ
りャ	○	りュ	りェ	りョ
るゥ	るヰ	○	るェ	るヲ
ゐャ	○	ゐュ	ゐェ	ゐョ
うゥ	うヰ	○	うェ	うヲ

拗音の例

いュう	(悠)	きャ	(伽)	きュう	(救)
ぎュう	(牛)	きョ	(距)	ぎョう	(凝)
くゥ	(火)	ぐゥ	(臥)	くヰ	(歸)
くェ	(化)	しャ	(寫)	じャ	(邪)
しュ	(首)	じュ	(樹)	しョ	(書)
じョ	(如)	すヰ	(水)	ちャ	(茶)
ちュう	(蟲)	ぢュつ	(述)	ちョ	(著)
ぢョ	(女)	つヰ	(墜)	にャ	(若)
にョ	(如)	ひャく	(百)	ひョう	(憑)
みャく	(脈)	ゆヰ	(遺)	りャく	(略)
りュう	(流)	りョう	(陵)	るヰ	(類)
うヰ	(茴)				

約音とは、二音が一音に約つた音である。さうして、其の約るにも、一定の方法があつて、亂るゝことが無い、此の方法を、漢學者は、反切法といふ。即ち、ろの二音の上を父位といひ、下を母位といふ。若しこの父母が、五十音の同行中にあるときは、母位に歸り、父母同列中に在るときは、父位に歸り、父母兩位共に、他行他列中に在るときは、母位と同じい父位の音に歸る。左に其の例を示す。

父母兩位同行中にある例

た ち つ（父位）	て（母位と歸音）	ちての約つて、てとなるは、「もちて」（以）をもてといふ類である。

父母兩位同列中にある例

あ い う え	お（父位歸音）	れほの約つて、れとなるは、「れほぢ」（祖父）を（れぢ）といふが如し。
は ひ ふ へ	ほ（母位）	

父位が母位の列より上にある例

さ（父位） し す せ	ろ（歸音）	されの約つて、そとなるは、「あさおみ」（朝臣）を「あそみ」といふやうなものである。
あ い う ね	お（母位）	

父位が母位の列より下にある例

か（歸音） き く（父位） け こ		くあの約つて、かとなるは、「かくある」（斯在）を、「かかる」といふ類である。
あ（母音） い う ね お		

右の外、尚、例を示せば、左の如し。

「さしあげ」（指上）を「ささげ」
「つたへ」（傳）を「つて」
「にある」（於在）を「なる」
「あらいろ」（荒磯）を「ありろ」
「かたりあふ」（語合）を「かたらふ」
「みずある」（不見在）を「みざる」
「このかた」（此方）を「こなた」
「にしきおり」（錦織）を「にしごり」
居拜切（キヨウイ） 誡（カイ） 徒老切（トラウ） 道（タウ）

などの類、推して知るべし。

「わがいも」（我妹）を「わぎも」
「あらうみ」（荒海）を「あるみ」
「あはうみ」（淡海）を「あふみ」
「まうち」（馬打）を「むち」
はたおり」（機織）を「はとり」
「かねうち」（金打）を「かぬち」
「しかれば」（然者）を「されば」

又尚、こゝに、一つの反切がある。これは、父母兩位共に同音同位で、直にその音に歸

るものである。之を即座切といふ。

父位	か	く	け	こ
母位	か	き	け	こ
歸音	が	ぎ	げ	ご

約音の法を、容易に知る仕方がある。それは、左右の手の五本の指を、五十音の五段に割り當て、右は父音を數へ、左は母音を數ふるのである。例へば、しやの二音を約めようとするには、右指を父字のある左行五音と定め、左指を母字の在る也行五音とし、やと數へて、第一指を屈ひれば、うの位を右指に移し、右の第一指に當る音、さを約音とし、又、さよの二音ならば、右指を加行五音とし、左指を也行五音とし、やいゆいよと數へて、五指を屈めたるが故に、更に右指も亦、かきくけこと數へて、五指を屈げ、うの小指に當るこの音を、約音とする類である。

或る文法家は、即座切を、二音重複略音と名づけて、これは二音が重なるから、其の一音を略くので、反切では無いといふ説を、述べてゐらるゝが斯様な論は、何うでも可いと思はる、余は何れにも入れて、學者の批評に任すとしよう。

其の例　みづつく（水漬）を　みづく

うれしい（嬉）　を　うれし

ふたり（二人）を　ふたり

かはら（河原）を　かはら

かなべ（金鍋）を　かなべ△

たびびと（旅人）を　たびと△

とゞまる（止る）を　とまる

こみやま（小宮山）を　こみやま

因に云ふ、これは、二重畧音にも、約音にもなるので、言葉を換ふれば、二重になるから、約むるのであると。

延音

延音は、約音の反對で、二音以上を發音する時、發音の便に隨うて、其の内の一音を、二音に呼び換ふるのである。故に其の二通りある。これに、加行延音と、波行延音との、二通りに、延びたるもの、波行延音は、言葉の終りが、加行音の終りが、波行音に、延びたるものである。

加行延音の例

聞く　を　きかく。

思はす。△を　思はさく。△
待つ。を　待たく。△
消ねぬ。を　消ねなく。
知らぬ。を　知らなく
曰ふ。を　曰はく
思ふ。を　思はく。
見む。を　見まく。△
掛けむ。を　掛けまく。△
告ぐる。を　告ぐらく。△
戀ふる。を　戀ふらく。△
申す。を　申さく。△
願ふ。を　願はく。
語る。を　語らく。△

しはぶき。(咳)を　しはぶかひ。△
いませ。(坐)を　いまさへ。△
もみぢ。(紅葉)を　もみだひ。△
笑み。を　ゑまひ。△
のれ。(宣)を　のらへ。△
歎き。を　歎かひ。△
返し。を　返さひ。△
住み。を　住まひ。
足り。を　足らひ。△
守り。を　守らひ。△
散る。を　散らふ。△
隱す。を　隱さふ。△
靡く。を　靡かふ。△

右の外に、良行延音といふ名をつくる、文法家もある。これは、

増す。を　増さる△
縮む。を　ちゞまる。
屈む。を　かゞまる。

の類であるが、古來より餘り少なき說なれば、參考までに記しおくのである。

略音

畧音とは、二音以上を連ねて、呼ぶとき、發音の便に隨うて、其の中の一音を、畧くのである。約音と間違へては不可ぬ。約音は、反切の法に依つて、一音に歸るもの、畧音は、全く發音の便から、自然に消滅するのである。これに四つの種類がある。其の例を左に、

阿行畧音の例

あ　かはゝ。ひ(河合)　を　かはひ
　　ながめ。(霖雨)　を　ながめ△
　　やゝ。た(八咫)△　を　やた△
　　ますゝ。ら(益荒雄)△を　ますらを
　　とをゝ。まり(十餘)　を　とをまり△

い

やまゝ。がた(山縣)　を　やまがた
たかい。さご(高砂)△　を　たかさご
めでい。たし(可愛)△　を　めでたし
あかい。し(明石)　を　あかし
いづい。し(出石)　を　いづし
はしい。ひ(乾飯)　を　はしひ
とをい。ち(十市)　を　とをち△
かりい。は(假庵)　を　かりほ△
おもい。し(重石)　を　おもし
かはう。ち(河内)　を　かはち
おはう。ち(大内)　を　おはち
やまう。しろ(山背)　を　やましろ
なるう。み(鳴海)　を　なるみ
まつう。ら(松浦)　を　まつら

をのうへ(岑の上)　を　をのへ

え　あかえひ(赤鱚)　を　あかひ

え音の辭は、元來、誠に尠ければ、この例、一つの外、索むることが、出來ぬと、先輩の人も、いつたである。

お　かさおき(笠置)　を　かさぎ

ふとおり(太織)　を　ふとり

ひおき(日置)　を　ひき△

かぢのおと(梶の音)　を　かぢのと△

よもぎおふ(蓬生)　を　よもぎふ

みちのおく(陸奥)　を　みちのく

伊列畧音の例

い　前に掲げたればこゝに略く

き　いきひゞき(息響)　を　いびき

かきなぐる(掻投)　を　かなぐる

やなぎがは(柳川)　を　やながは

こきむらさき(濃紫)　を　こむらさき

つばきいち(椿市)　を　つばいち

よきこと(吉事)　を　よごと△

し　やましか(山鹿)　を　やまが

あしたち(足立)　を　あだち

のきはし(軒端)　を　のきば

あしふみ(足蹈)　を　あぶみ

ち　はちす(蓮)　を　はす

くちとく(口説)　を　くどく

かぢとり(楫取)　を　かどり△

に　かには(樺)△　を　かば

くにす(國栖)　を　くず

はにふ(埴生)　を　はぶ

かにもり(掃部)　を　かもり

はにし(土師)　を　はし

ひ　はやひと(隼人)　を　はやと

ちかひごと(誓言)　を　ちかごと△

いひぼ(飯粒)　を　いぼ△

み　かみさし(髮指)　を　かざし

あみしろ(網代)　を　あじろ

とみやま(富山)　を　とやま

ゆみづる(弓弦)　を　ゆづる△

しらがみ(白髮)　を　しらが

り　まがりたま(曲玉)　を　まがたま

かりの(狩野)　を　かの

とりとり(鳥取)　を　ととり

くすりし(藥師)　を　くすし

かぶりき(冠木)　を　かぶき

いさゐは、省かる例證を、求むることが出來ぬ。これは、いは辞少きためで、ゐは重く響くが故に、省かることが、無いのであらう。

良行畧音の例

ら　すめらみおや(皇祖)　を　すめみおや

遠からば　を　遠かば

なぞらふ(准)　を　なぞふ

すめらぐに(皇國)　を　すめぐに

り　此の音略かる例は前に在り

る　かへるさ(歸樣)　を　かへさ△

かへるで(楓)△　を　かへで

あるなり(有也)　を　あなり△

あるめり(有るめり)△　を　あめり△

れ　たはれごと(戯言)△　を　たはごと

これは(此は)　を　こは

さゞれなみ(小波)　を　さゞなみ

わすれらる(被忘)　を　わすらる

たはれ°わざ(戯業)　を　たはわざ
ろれ°が(其が)　を　ろが
たれ°が(誰が)　を　たが
かれ°の(彼の)　を　かの
よろ°し(宜し)　を　よし
をろ°がむ(拜む)△　を　をがむ
こゝろ°ち(心地)△　を　こゝち
ところ°(所)　を　とこ
おもしろ°い(面白い)　を　おもしい(北越地方などにて)

同音重複畧音の例

前の即座切の所に、記したれば、こゝに其の例を畧く。

音通

音通とは、發音の便に隨うて、一音をろれと、同じい行に在る他の音、又ろれと同じい列に在る他の音に、呼び換ふることあるをいふ。さうして、其の同行の音に、通ずるを、行通或は縱通といひ、同列の音に通ずるを、列通或は横通と云ふ。

行通の中にも、亦左の十種ある。

(一)　衣列の音を、阿列の音に呼び換ふるもの。
(二)　伊列の音を、宇列の音に呼び換ふるもの。
(三)　伊列の音を、衣列の音に呼び換ふるもの。
(四)　宇列の音を、於列の音に呼び換ふるもの。
(五)　阿列の音を、於列の音に呼び換ふるもの。
(六)　於列の音を、阿列の音に呼び換ふるもの。
(七)　於列の音を、宇列の音に呼び換ふるもの。
(八)　伊列の音を、於列の音に呼び換ふるもの。
(九)　衣列の音を、伊列の音に呼び換ふるもの。
(十)　於列の音を、伊列の音に呼び換ふるもの。

(一)の例　加行　さけ°や(酒屋)　を　さか°や
さけ°な(酒菜)　を　さか°な

左行

さけ。だる(酒樽)△ を さかだる

たけ。ばうき(竹箒) を たかばうき

たけ。むら(篁) を たかむら

すげ。がさ(菅笠) を すがのがさ△

かぜ。ぐるま(風車) を かざぐるま

かぜ。かみ(風上) を かざかみ

かぜ。おと(風音) を かざおと

かぜ。ぐすり(風薬) を かざぐすり

てまくら(手枕) を たまくら△

てのうこ(掌) を たなうこ

かね。もの(金物)△ を かなもの

いね。ば(稲葉)△ を いなば

かね。ゐ(金井) を かなゐ

ふね。やど(船宿) を ふなやど

波行

うべ。づゝみ(上包) を うはづゝみ

なべ。しろ(苗代)△ を なはしろ

うべ。あご(上顎)△ を うはあご

あめ。がさ(雨傘) を あまがさ

つめ。はじき(爪弾) を つまはじき

つめ。さき(爪先) を つまさき

ひね。みづ(冷水) を ひやみづ

ひね。むぎ(冷麦) を ひやむぎ

ひね。ざけ(冷酒) を ひやざけ

あれ。をとこ(荒男) を あらをとこ

あれ。なみ(荒波) を あらなみ

むれ。どり(群鳥) を むらどり

こゑ。いろ(聲色)△ を こわいろ

すゑ。ね(末枝)△ を すわね

麻行

良行

也行

和行

(二)の例

ねやまふ(褥)△　を　うやまふ
あゆく(歩)△　を　あるく
いめ(夢)△　を　ゆめ
いを(魚)△　を　うを
さい(才)　を　ざえ△
ちち(父)　を　てて
うつしみ(現身)△　を　うつせみ
ちとし(千年)△　を　ちとせ
みやすし(見易)　を　めやすし△
うさぎ(兎)　を　をさぎ△
おゆび(お指)　を　および△
おはす(負)　を　おはす
まろし(丸)　を　まろし

(三)の例

うろ(虚言)　を　をそ△

(四)の例

たわい(撓)に　を　とをゝに△
まなか(最中)　を　もなか
あたご(愛宕)　を　おたぎ
きかす(聞かす)　を　きこす△
よい　を　やゝ
よわし(弱し)　を　やわし△
たをやか(婉娟)　を　たわやか
しろやま(白山)　を　しらやま

(五)の例

うろに(坐)　を　すゞろに△
まをす(申)△　を　まうす
しのぶ(忍)△　を　しぬぶ△

(六)の例

(七)の例

(八)の例

いづこ(何處)　を　いづく

ひかげ(火影)　を　はかげ△

きの葉(木の葉)　を　このは

みち月(滿月)△　を　もちづき

いき(息)　を　をき△

ねる(居)　を　をる

きがね(黃金)　を　こがね

(九)の例

はやて(疾風)　を　はやち△

(十)の例

あたご(愛宕)　を　おたぎ

右十種の中で、(一)例の辭が、最も多くあつて、而も二つの辭を連ねて、一つの辭に呼び做す時に限る。

列通の中にも、亦、左の五種あり。

(一) 阿列の音の通ひたるもの。

(二) 伊列の音の通ひたるもの。

(三) 宇列の音の通ひたるもの。

(四) 衣列の音の通ひたるもの。

(五) 於列の音の通ひたるもの。

(一)の例

おなじ(同)　を　をやじ△

かば(蒲)　を　がま

われ(吾)　を　われ

とば(苫)△　を　とま

さやぐ(騷)△　を　さわぐ

はしる(走)　を　わしる

しまらく(暫)△　を　しばらく

はつか(僅)△　を　わづか

あなにく(可憎)　を　あやにく
はなす(放)　を　はがす△
はるあめ(春雨)　を　はるさめ

(二)の例

けち(消)△　を　けし
へび(蛇)　を　へみ
さびし(寂)　を　さみし
なみは(波速)　を　なには
びろか(密)　を　みうか△
あめつち(天地)　を　あめつし△

(三)の例

わすらる(被忘)　を　わすらゆ△
うむや(産屋)　を　うぶや
たはびれ(戯)　を　たはぶれ
うめ(梅)　を　むめ
けぶり(烟)　を　けむり

うし(大人)　を　ぬし
さぶらふ(待)　を　さむらふ
けず(消)　を　けつ△

(四)の例

おはえ(大兄)　を　おはね△
おしなめ(押並)　を　おしなべ
ゆきかね(行兼)　を　ゆきがて△

(五)の例

ともしび(燈火)　を　とぼしび
やも(八百)△　を　やほ
こきはく(若干)△　を　そきはく
をと(男)　を　をのこ△
まぼる(守)△　を　まもる
のく(退)　を　ぞく

音便

音便

音便とは、發音の便に從うて、原の音が、他の音に變はり、或は促り、或は省かれ、或は添はることなど、あるをいふ。これに左の六種あり。

(一) 伊音便。
(二) 宇音便。
(三) 鼻音便。
(四) 促音便。
(五) 奈行音便。
(六) 麻行音便。

伊音便

伊音便に、また三類あり、即ち、き‖の轉じて、い‖となるものと、し‖の轉じて、い‖となるものと、唯い‖を添へて呼ぶものとあり。

き‖の轉じてい‖となるものゝ例

きさき(后)　を　きさい△

さきはひ(幸)△　を　さいはひ
おきて(於)　を　おいて
つきて(就)　を　ついて
さきたま(埼玉)　を　さいたま
すきがき(透垣)　を　すいがい△
かきて(書)　を　かいて
つきたち(朔)△　を　ついたち
つきたて(衝立)△　を　ついたて
ほしきまゝ(恣)　を　ほしいまゝ
よきこと(善事)　を　よいこと
れはきに(大)　を　おほいに
さきくさ(三枝)△　を　さいくさ△
さきなむ(呵責)△　を　さいなむ△

し‖の轉じてい‖となる例

わたくし○(私) を わたくい●△
まし○て(況) を まい●て△
さし○て(指) を さい●て
もてなし○て(饗應) を もてない●て
とはし○(遠) を とはい●
さむし○(寒) を さむい●
あつし○(暑) を あつい●
ちかし○(近) を ちかい●
あし○た(朝) を あい●た△
くし○(串) を くい●

い‖を唯添へて呼ぶ例

しか(詩歌) を しい●か△
しじ(四時) を しい●じ△
むか(六日)△ を むい●か
しろん(至尊) を しい●ろん

字音便とは、か‖く‖は‖ひ‖ふ‖へ‖は‖ま‖み‖む‖り‖や‖ゐ‖を‖が、う‖となるものと、唯、う‖を添ふると

の、十五類をいふ。

お‖の例があるさて

いもお○と(妹) を いもう●と などいふ人もあれどこれは道理に合はぬ

か‖の例

かか○ぶり(冠)△ を かう●ぶり

く‖の例

おもく○かろく○(重輕)を おもう●かろう●
まつたく○(全) を まつたう●
おなじく○(同) を おなじう●
あつく○さむく○(暑寒)を あつう●さむう●
ひやく○し(拍子)△ を ひやう●し
かく○し(格子)△ を かう●し

は‖の例

なが○く(長) を なが●う

はは。き(帚)△　を　はう。き

かは。はり(蝙蝠)△　を　かう。はり(今でもかうもりといふ)

ひ‖の例

こまひと(高麗人)と　こまう。ど△

おひと(首)　を　おう。と△

まひと(眞人)　を　まう。と△

おもひて(思)　を　おも。うて

いひて(言)　を　いう。て

したがひて(從)　を　したがう。て

とひて(問)　を　とう。て

いもひと(妹人)△　を　いもう。と

かりひと(獵人)　を　かりう。ど

ふ‖の例

さふらふ(候)△　を　さう。らふ

はふし(法師)　を　はう。し

へ‖の例

まへつぎみ(卿)△　を　まう。ちぎみ△

つかへまつる(仕奉)を　つかう。まつる

は‖の例

なはし(直衣)　を　なう。し△

なはらひ(直會)　を　なら。ひ

ま‖の例

たまはり(賜)　を　たう。ばり△

やまだ(山田)　を　やう。だ

み‖の例

こみち(小路)　を　こう。ぢ

かみかき(髮掻)△　を　かう。がい

てみづ(手水)　を　てう。づ

かみべ(神戸)　を　かう。べ

かみつけ(上野)　を　かうづけ

む‖の例

ひむか(日向)　を　ひうが

かむし(柑子)△　を　かうじ

たむけ(峠)△　を　たうげ

り‖の例

とりで(取出)　を　とうで△

や‖の例

やゝ〳〵(漸々)△　を　やう〳〵

ゐ‖の例

まゐで(參出)　を　まうで

を‖の例

まをす(申)△　を　まうす

う‖を唯添へて呼ぶ例

ふふ(夫婦)△　を　ふうふ

やか(八日)△　を　やうか

ふき(富貴)△　を　ふうき

によばう(女房)△　を　にようばう

ほこ(布袴)△　を　ほうこ

鼻音便は、み‖ひ‖を鼻音ん‖に呼び換ふるものと、又、一音の下に、鼻音を唯添へて唱ふるものと、又、鼻音を省いていふのとある。此の外に、又、にぬむもはほりへるの九音も、鼻音便に稱ふることもある。

み‖の例

かみのとの(頭殿)　を　かんのとの△

やみて(止)　を　やんで

かみなぎ(巫)△　を　かんなぎ

かみて(嚙)　を　かんで

やみて(病)　を　やんで

くみて(汲)　を　くんで

のみて(飲)　を　のんで

をみな(女)△　を　をんな

くやみて(悔)　を　くやん・で

ひ‖の例

よびて(呼)　を　よん・で
まなびて(學)　を　まなん・で
とびて(飛)　を　とん・で
とびや(問屋)　を　とん・や
たよびて(及)　を　れよん・で
あきひと(商人)　を　あきん・ど
むすびて(結)　を　むすん・で
おもひはかる(慮)　を　おもんばかる

に‖の例

いかに(如何)　を　いかん・に
たには(丹波)　△　を　たんば

ぬ‖の例

かなきぬ(金巾)　を　かなきん・
こぬか(粉糠)　を　こんか

なひお(汝)　を　なんぢ

ひ‖の例

ひがし(東)　を　ひん・がし

も‖の例

ねもごろ(懇)　△　を　ねん・ごろ

は‖の例

わらはべ(童)　△　を　わらん・べ

ほ‖の例

ほとほと(殆)　△　を　ほとん・ど

り‖の例

さかり(盛)　を　さかん・
くだり(件)　を　くだん・
をはりぬ(畢)　を　をはんぬ　△
かりな(假名)(今はかなといふ)　を　かん・な　△

へ‖の例

つかへまつる(仕奉)　を　つかんまつる

〓るの例

べかるめり(可)　を　べかんめり

右の外に、俗語では、まの二音も、鼻音となることがある。例へば、

さま(様)　を　さん

どの(殿)　を　どん

などの如し。

鼻音を唯添へて呼ぶ例

みな(皆)　を　みんな

ずば(不者)　を　ずんば

まな(真字)　を　まんな

さじき(仮床)　を　さんじき

まゝ(儘)　を　まんま

めとり(雌鶏)　を　めんどり

ばば(馬場)　を　ばんば

鼻音を省いていふ例

もんじ(文字)　を　もじ

あんない(案内)　を　あない△

ねんぶつ(念佛)　を　ねぶつ△

はんい(本意)　を　はい

促音便は、ちりひつぶきを、促音つに呼び換へ、又は、一音の下に、促音づを添へて、唱ふるのがある。

〓の例

うちて(撃)　を　うつて

かちて(勝)　を　かつて

はなちて(放)　を　はなつて

たちて(立)　を　たつて

もちて(持)　を　もつて

り‖の例

かぎ°りて(限)
きたり°て(來)
かたり°て(語)
とり°て(取)
さり°て(去)
きり°て(切手)

ひ‖の例

おもひ°て(思)
まひ°て(舞)
したがひ°て(從)
をひ°と(夫)
たゝかひ°て(戰)
かひ°て(貿)

をかぎつ•て
をきたつ•て
をかたつ•て
をとつ•て
をさつ•て
をきつ•て

をおもつ•て
をまつ•て
をしたがつ•て
をおつ•と
をたゝかつ•て
をかつ•て

つ‖の例

やつ°こ(奴)

ふ‖の例

たふ°とし(尊)

き‖の例

ひきたつる(引立)

促音を唯添ふる例

もはら(專)△
もとも(最)△
まつたく(全)△
まひら(眞平)△
あはれ(天晴)△

をやつ•こ

をたつ•とし

をひつ•たつる

をもつ•ばら
をもつ•とも
をまつ•たく
をまつ•ひら
をあつ•ばれ

奈行音便

奈行音便は、あわやの行の音が、奈行の音に、轉ずるのである。

‖あ行の例

せんあ°く(善惡)　を　せんな•く
ぎんあ°ん(銀杏)△　を　ぎんな•ん
えんい°ん(延引)　を　えんに•ん
うんう°ん(云云)△　を　うんぬ•ん
いんね°ん(因緣)△　を　いんね•ん
くわんお°ん(觀音)　を　くわんの•ん

わ‖行の例

げんわ°(元和)　を　げんな•
にんわ°(仁和)　を　にんな•
てんわ°う(天皇)　を　てんの•う
しんわ°う(親王)　を　しんの•う
りんゑ°(輪回)　を　りんね•
あんを°ん(安穩)　を　あんの•ん

や‖行の例

さんよ°う(算用)△　を　さんに•よう
まんね°ふ(萬葉)　を　まんね•ふ

ま‖行音便は、これもあ‖わ‖や‖の行の音が、ま‖行の音に、轉ずるものをいふ。

あ‖行の例

せんあ°く(善惡)　を　せんま•く
なむあ°みだぶつ(南無阿彌陀佛)　を　なむま•みだぶつ

わ‖行の例

さんゐ°(三位)　を　さんみ•

や‖行の例

おんや°うし(陰陽師)　を　おんみ•やうし△

連聲

連聲とは、二つ以上の假名を連ねて呼ぶときに、上の假名の影響を受けて、爲に、下の假名が、他の音に、轉ずるものをいふ。例へば、

ほつい°(發意)　を　ほつち•

てつね（鐵圈）　を　てつち
けつねき（闕腋）△　を　けつてき

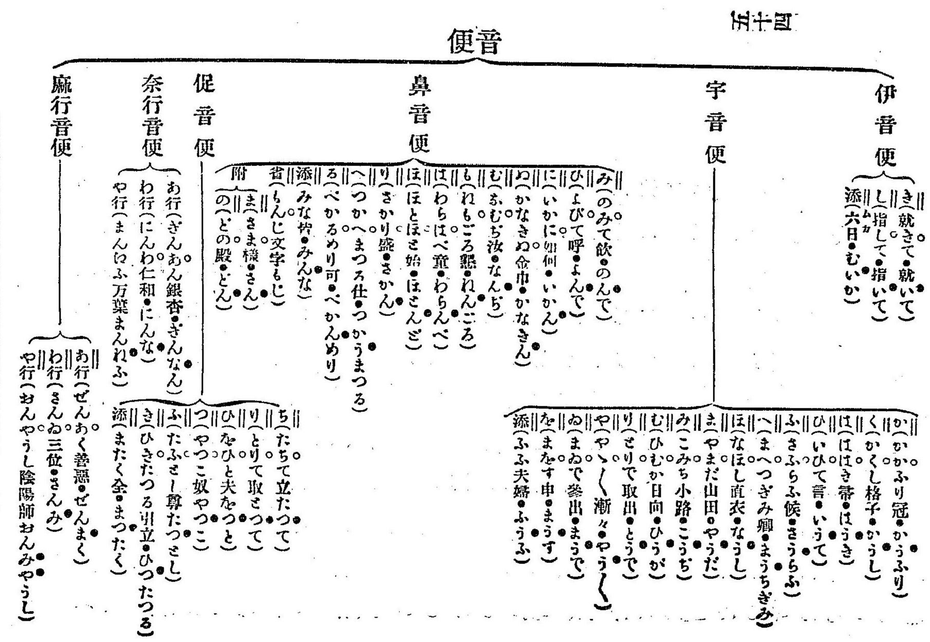
などの類である。

以上述べたる、約音、畧音、音通、音便及び連聲を解釋する上に於いて、甚だ紛はしい所がある。即ち、約音の即座切は、畧音の二重音と同じくて、而もその音の省かるゝ點に於ては、何れもおなじい。又、音通と連聲とは、共に列通なれば、これも亦殆んど異なる性質が無いやうにある。次に音便も連聲も、共に便利上他音に轉ずるものなれば、尚其の區別が立ちにくいのである。故に、今更に其等の區別を、左に記すとしよう。

約音は、便不便に拘らず、只、反切の法に依つて、一音に歸するもの。畧音は、全く發音の便利から、自然に消滅するもの。音通は、これも發音が便利であるより、其の行或は同じい列にある音に、通ずるもの。連聲も、矢張多くは、うの同列に通ずれども、之を書きあらはす上に於ては、原音を改めぬのである。音便は、其の行列に關せず、唯其の連聲の便のみの上から、原音を變じ、さうして、之を書

くにも、變じた音通りに、改むるのである。併し、今世には、印をつけたやうな辭は、假令音便にもしろ、如何にもしろ、用ゐぬがよい。假令、中古の人に發聲の便があつたにもせよ、今人には、却つて、不便となるが、澤山ある。然るに、固陋の國學者が、わざ〳〵、耳遠い辭を書き竝べて、村夫子を氣取つてゐる者が間々ある。實に箇樣な人は、文明を妨ぐる、獅子身中の蟲といはねばならぬ。故に、余は專斷にも、印のある類の辭は、現代の文章には、書かぬことゝしたのである。又詳しく言ふとすれば、んむぬなども、仲々六かしいもので、例へば、諸はさぬ、三はさむと、かゝねばならぬ筈なれど、今や既に、ん音の如くに聞ゆる以上は、區別せぬことにしたいものである。

又以上述べたる中で、音便は、假名遣のために、是非とも記憶して、おかねばならぬ、大切なものであるから、尚更に、圖表に作つて示さう。



練習問題

(一) 何故に雅俗對稱和漢文典を講ぜねばならぬか。

(二) 撥音韻とは如何なるものか。

(三) 促韻又音とは如何なるものか例を擧げて答へよ。

(四) 鼻音とは如何なるものか。

(五) 清音濁音半濁音とは如何。

(六) 五十音と伊呂波の區別を言へ。

(七) 列と行とは如何なるものか例を擧げて記せ。

(八) 本濁音連濁音の定義を下し且本書外の例を十づゝを擧げよ。

(九) 直音拗音を定義し且二三の例を擧げよ。

(十) 稍類の異なつた例を二つ宛擧げて約音は如何なるものかを述べよ。

(十一) 即座切とは如何なるものか例を擧げて答へよ。

(十二) 延音とは如何なるものかを例を擧げて示せ。

(十三) 延音に幾種類あるか例を擧げて答へよ。

(十四) 略音に、幾種類あるか。各、例を擧げて答へよ。
(十五) 音通に、幾種あるか。詳かに示せ。
(十六) 行通、列通とは、如何なることか。各、うの例十宛を記せ。
(十七) 音便を大別して、幾種類となすか。
(十八) 伊音便、宇音便の例、各、五つ宛を擧げよ。
(十九) 鼻音便、促音便、奈行音便、麻行音便の例、三つ宛を擧げよ。
(二十) 連聲とは、如何なるものか。
(廿一) 約音と、畧音との區別を、詳しく述べよ。
(廿二) 二重畧音と、即座切との異同を言へ。
(廿三) 連聲と、音通との區別を、詳解せよ。
(廿四) 音便と、連聲との區別を解し、且例を擧げよ。
(廿五) 次の如きものは、何の部に屬すべきものか。

もんじ(文字)　を　もじ　　ほんい(本意)　を　ほい
よろし(宜)　を　よし　　かはばら(河原)　を　かはら

(廿六) 上野なる圖書館、墨田なる花、伊藤博文なる人、

右のなるは、何れも差支なきか、あらば其の理由を記せ。

(廿七) 左の語は、如何なる部に屬すべきか、且元來の言葉に直せ。

うつて(擊)　はなつて(放)　かぎつて(限)　うつて(賣)
かつて(買)　をつと(夫)　まつたく(全)　まつぴら(眞平)

(廿八) 左の語の誤りを正せ。

によふばう(女房)　ひよが(日向)　とをい(遠)　つひて(就)

(廿九) 左の語を延音になせ。

つく　すれ

(三十) 左の語に付いて、知る處を記せ。

とまる(止)　告ぐらく　笠置山　富山縣　さか屋　なはしろ
はるさめ　おしなべ　埼玉縣　妹　戀　お松どん　もつばら

銀杏　正三位

文字

文字は、言葉を形にうつしとゞむる、符號である。現今、我が國一般に用ゐる符號文字は、假名と漢字の二通りある。さうして、假名は、音標文字で、漢字は、意標文字である。

音標文字
意標文字

音標文字とは、唯、その音を、表はすのみで、敢て、意味を示すものでは無い。意標文字とは、一字で、其の意義を、表はすものである。

音標文字、即ち假名に、左の種類がある。

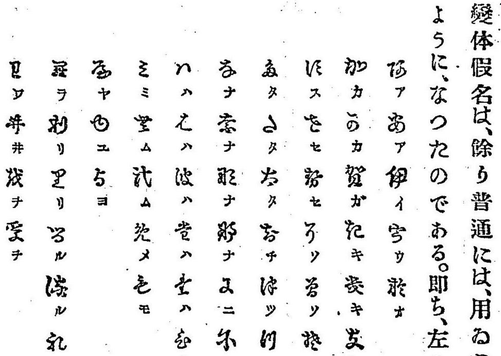
- 假名
  - 片假名
    - 清音假名
    - 濁音假名
    - 半濁音假名
  - 平假名
    - 合略文字
    - 長韻符
  - 變体假名
    - 送字
- 萬葉假名

右の中、片假名、平假名、及び、その清音、濁音、半濁音は、既に示したれば、こゝに、之を畧

變体假名

して、變体假名のことから述べよう。

變体假名は、餘り普通には、用ゐぬところから、平假名片假名に對して、變体といふように、なつたのである。即ち、左の如き文字である。



これは、讀むこと丈は、覺えておかねばならぬが、今代の文章には、書くぬが可い。

合略文字

合略文字

二字を、書き寫す代りに、便宜、二字を合して、一字にするのである。左に、現今用ゐるものを示す。

平假名　ㄛ(こと)　ゟ(より)　ㄥ(なり)

片假名　ㄱ(コト)　片(トキ)　疋(トモ)　メ(シテ)

右は、一己人の筆記などに、用ゐるは可いけれど、正式の文には、書かぬが可い。

長韻符

長韻符

音韻を、長く呼ぶときの、符號である。現今、我が國では、ー を用ゐてゐる。文部省でも小學校には、これを用ゐることに、定められたゐの用法は、左の通りである。

(道具)　ドーグ　どーぐ

(麥酒)　ビール　びーる

(孝行)　コーコー　こーこー

(私見)

これは、小學校尋常科の生徒に、書かしむるには、可いかも知れぬけれど、ゐれ以上には、西洋語を書き顯はす外は、用ゐぬが可い。

送字

送字

一字、又は、二字以上の假名を、繰り返して、二回、又は二回以上、書かうとするときに、二回以下の假名を、書く代りに、ヽ〳〵などの、符號を用ゐるのである。左に、ゐの用法を示す。

(桃)　モヽ　もヽ　(獅子)　シヽ　しヽ　(木木)　キヾ　きヾ

(浦浦)　ウラ〳〵　うら〳〵　(區區)　マチ〳〵　まち〳〵

(共共)　トモ〴〵　とも〴〵　(交交)　コモ〴〵　こも〴〵

(私見)

これは、正式の文にも、用ゐて可いけれども、行を改めて、書く所や、又、三字以上を、繰り返す所には、用ゐぬが善からう。

萬葉假名

萬葉假名

萬葉假名は、漢字を假名として、用ゐたものである。これは、昔、未だ片假名平假名のなかつた時代に、我が國の言葉を、うつす爲に、用ゐた漢字の、用ゐ方である。昔の歌を集めた、萬葉集といふ本には、大概萬葉假名で、書いてある。即ち、其の文字を左に

示す。

阿安ア伊以意移イ干宇烏ウ衣愛江エ於淤意オ加
伽可カ幾支起吉キ久九ク氣祁計介希ケ古許故
己コ左佐射サ志斯偲シ須才數ス世勢セ曾僧所ソ太
多タ知智チ津都ツ天豆テ止登刀等ト奈那南ナ仁爾
耳ニ奴努ヌ泥禰年子乃能廼農ノ八波槃方ハ飛比
婁ヒ不布フ倍幣閉返ヘ保本ホ麻末萬滿マ美彌微
見ミ牟武舞无ム賣米メ毛母モ夜也耶屋矢ヤ由ユ余
用與ヨ羅良ラ利里理リ流留累類ル禮連麗レ呂路
露ロ和回王ヲ韋爲井井惠衛會エ袁遠乎弘越ヲ我
賀牙ガ藝儀ギ愚具グ下牙ゲ碁吾期ゴ邪ザ慈珥ジ受ズ是ゼ
叙ゾ陀ダ遲ヂ豆圖ヅ傳デ杼ド婆バ毘備ビ夫部ブ倍ベ頻ボ

（私見）

これは、國語專門學者に、ならうと思ふ人の外は、餘り覺ゆる程の、價あるものでもあるまい。

意標文字

意標文字、即ち、漢字の出來た原則が、四つある。

第一を象形といふ。即ち、物の形に象どる義で、

日 月 魚 鳥 舟 車 口 手 などの類である。

古は篆書で、其の形を、顯はしたれども、後に隷書となり、又楷書と變つた爲に、今の字體は、全く原の形を、失ふたのである。

第二を指事といふ。即ち、事を指し示す義で、

一 二 三 上 下 などの類である。

象形の法で、形ある物を畫きあらはし、指事の法で、形の無い事を、指し示す字を設けたのである。

第三を會意といふ。其の意を會合する義、即ち二字以上を、組み合したもので、

信 仁 安 休 苗 などの類である。

會意の法は、字と字とを合せて、一つの意義を作つたもので、例へば、人の言は、信でなければならぬから、人扁に言を信となし。二人以上、即ち社會には、

相互に交はる方法の道、即ち仁がなければならぬ、故に人扁に二を仁となし。一家を治むるには、男子は外に出で、働き、女子は家に在りて、内を守らねばならぬ、然るを、男女共に外に出るやうになるのは、貧窮の時である、故に、家冠に、女といふ字を書いて、安き意を示し。人は、木の傍で休むから、人扁に木を休となし、田に植うる草は、苗であるから、艸冠に田を苗字となした類ひである。

第四を形聲といふ。これも亦、二字以上を組合して、造つたものである。即ち、

江　河　鳩　鶴　咿唔　などの類である。

形聲の法は、物形を示せる字に、其の音の聲を、付けたものである。

音訓

漢字を、支那人が讀むやうに、讀み讀み方を、字の音と名づけ、其の漢字の、本義に因つて、我が國の譯語を、付けたるものを、訓といふ。例へば、

（支那語）シヨウチク　松竹　メイカ　梅　カク　鶴　キ　龜　などの如し。
（國語）マツ　タケ　ウメ　ツル　カメ

音訓

漢音と呉音乃唐音

今、吾等が、字の音と云うてゐるのは、昔、支那の音が、我が國に傳はつてより、段々訛つて來たものであるから、傳來當時の、支那音では無くて、自然と、一種の日本的支那音となつたものである。さうして、其の日本的支那音の儘に、讀むを音讀といふ。例へば、如是我聞と、讀むやうなものである。然るに、目には、支那字を見ながら、口には、其れと同じ意をもつ我が國語で讀むを、訓讀といふ、例へば、如是我聞と誦へ行く類ひである。

漢音と呉音附唐音

支那北方の音が、我が國に傳はつたものを、漢音と唱へ、南方の音が、傳はつたのを、呉音と呼び、うの後に傳はつたのを、唐音といふ、我が國に傳はつた支那の音は、呉音最も多く、漢音は其の次で、唐音は甚だ稀である。抑々我邦の留學生が、支那の中土なる唐に行き、漢學を傳へてから、段々と漢音が弘まつたのであるが、呉音は呉の國即ち今の江蘇省地方の音で、我が邦を距つること近く、從つて航通が便であつた爲、互に往來して、其の音を傳へたものが多く、殊けて佛經の如きは、其の布教者、大概呉から

來た爲に、讀經は率ね呉音を用ゐるやうになつたのである、然るに、日が經つに從うて、段々うの原音を失ひ、遂に、前にも述べた如く、日本的支那音になつて、支那人が、言ふのとは、非常な相違がある。さうして、支那近世の音を指して、唐音といふやうになつた。今其の例を擧ぐれば、

漢音＝京（ケイ）行（カウ）明（メイ）清（セイ）
呉音＝京（キャウ）行（ギャウ）明（ミャウ）清（シャウ）
唐音＝京（キン）行（コン）明（ミン）清（シン）

などのやうなものである、然れども、今は、うの音の如何に拘らず、一般に漢字というてゐる。

漢字の數

支那の字書に、載せてある字數は、大凡六七萬もあるけれど、實際用ゐる數は、二千字内外のものであらう、さうして、形聲の字は、最も多く、全數の十分の八九を占め、象形、指事、會意中の字を以て、其の字聲となす、故に、形聲の方式から、其の字を見て、其の聲の何たるを知れば、一例を推して、十百に及ぼし、力を費さないで、字音を悟ることが出來るものである。

象形、指事、會意の文字は、其字音を知ることが、六かしいけれども、形聲の字は、其の扁旁を見て、直にうの音を知ることが出來る。さうして、其の聲を付くる所、或は右に、或は左に、或は上下内外に在る。例へば、

左形右聲　猫（苗聲）狸（里聲）の類　犬に從ひ　苗（苗聲）里（里聲）
右形左聲　鴛（夗聲）鴦（央聲）の類　鳥に從ひ　雀（雀聲）奚（奚聲）
上形下聲　笄（幵聲）笠（立聲）の類　竹に從ひ　干（干聲）立（立聲）
下形上聲　患（串聲）恕（如聲）の類　心に從ひ　串（串聲）如（如聲）
外形内聲　圍（韋聲）圜（睘聲）の類　口に從ひ　有（有聲）青（青聲）
内形外聲　問（門聲）瓣（辡聲）の類　口瓜に從ひ　門（門聲）辡（辡聲）

の如くで、此の外、變式もあるけれど、其の類至つて少ないものである。

註　漢字の左側に在る部を扁と云ひ、漢字の右側に在る部を、旁と呼び、漢字の上部にあるを、冠と稱ふ。

漢字の書体

漢字には、種々の書き樣がある、これを書体といふ。其の重なるものは、篆書、隷書、楷

書、行書、草書である。

篆書は、支那古代の書体で、中には、物の形を、そのまゝ寫し出したのもある。現今では、普通に用ゐない。

隷書は、篆書を略したる書体で、篆書に次いで、出たもので、これも、今は普通には用ゐぬ。

楷書は、一名眞書とも云うて、行草の二体に比ぶれば、點畫を正しく書く。現今は、最も多く用ゐられてある。

行書は、楷書の點畫を畧して、書く書体であるから、便宜上、これも多く用ゐられてある。

草書は、行書の點畫を、更に畧したもので、今は行書に次いで、用ゐられてある。

右五体の中にも、色々の小區別があるけれども、今は左程穿鑿するの必要が無いと思はる、故に、唯、五体字の例を、左に示す。

篆書　孝當竭力忠則盡命

隷書　孝當竭力忠則盡命

楷書　孝當竭力忠則盡命

行書　孝當竭力忠則盡命

草書　孝當竭力忠則盡命

送字

漢字の送字

漢字にも、送字というて、よいものがある。例へば

欣々　碌々　大賀々々　嗚呼可喜々々々々

などの類である。

練習問題二

(一) 文字の種類を擧げて、之を説明せよ。

(二) 合畧文字とは如何なるものか、例を擧げて言へ。

(三) 長韻符とは如何、且、これが効用を批評せよ。

(四) 送字とは如何なるものか、例を擧げて説明し、且、如何なる場合に、用ゐられぬかを言へ。

(五) 萬葉假名とは如何、た行とば行との例を擧げよ。

(六) 意標文字の原則を、例を擧げて、單簡に說け。

(七) 音訓の解を、本書外の例を擧げて、說明せよ。

(八) 漢音、吳音、及び唐音とは、如何なるものか。

(九) 漢字の數は、大凡何程か、且、普通用ゐる字數を言へ。

(十) 形聲の文字の、音を知る法は如何。

(十一) 漢字書体を、例を擧げて說明せよ。

(十二) 漢字にも送字はあらうか、あらば例を示して言へ。

(十三) 左の字どもを、片假名に直せ。

あ 賀 お 小 ゑ ほ も ゝ ま ほ ま を ゑ

儀 爾 彌 遠 邪 豆 偏 氣 弖 婆 倍 愛 希

(十四) 左の假名の音には○、訓には●を附けよ。

菊(キク) 車(クルマ) 本(キ) 本(ホン) 蘭(ラン) 類(ルヰ) 筆(フデ) 字(ジ) 行燈(アンドン)

(十五) 變体假名ばかりで、三十字以上五十字以下の文を作れ。

假名遣

昔は、言葉を其の音のまゝに、文字にも書いたから、發音と文字とは、一致してゐたけれど、月日の經つに從うて、發音は次第に變つて來た、然るに、文字は元のまゝの書き方を、用ゐてゐるから、こゝに、發音と文字とは、一致しないものが出來て、遂に假名遣ひの法を知らねばならぬ、必要が起つて來るのである。

さて、此發音と、文字との、紛はしいものを、悉く擧げなば、其の數は、何萬とあらう。之を一々諳記しようといふことは、到底出來ぬことである。故に、先輩の考へ出した方法が、二通りある。甲は、意義から區別するもの、例へば、阿行の方は「發生の義、和行の方は、ろの反對であるから、大(オホ)きく、多(オホ)しは、阿行で、怠(ヲコタ)る、懦(ヲヂ)るは、和行であると、判斷するやうなものである。乙は、二つの紛はしい假名を、取り出でゝ、一つの少い方を記憶し、他の一つを推し量るもの、例へば、いとゐと紛るとすれば、いの假名を書くべきものは、二百五十で、ゐの假名を書くべきものが、僅に十七八しか無い、故に其の少いゐの方を記憶して、ろの他は、皆いの假名であると、推し量るやうなものである。甲乙何れが善いかといふに、甲は開發的であるけれど、牽强附會に陷り易く、乙は

注入的であるけれど、確實である、故に、余は乙の法に從ひ、更に、余の意見をも加へて、國語の假名遣から述べよう。

國語假名遣

國語假名遣の紛れ易いもの

國語の假名に於て、紛れ易いのは、大概左の場合である。

(一) い‖ゐ‖ひ‖

い‖ゐ‖は語の上中下に拘らず紛れ、ひ‖とい‖、及びひ‖とゐ‖は、語の中下に於て、紛るゝものである。

(二) え‖ゑ‖へ‖

え‖ゑ‖は、語の上中下共に紛れ、へ‖とえ‖、へ‖とゑ‖は、語の中下に於てのみ、紛るるものである。

(三) を‖お‖ほ‖

を‖とお‖とは、上中下何れも紛れ、ほ‖とほ‖と、又はを‖とほ‖とは、中下に於て、紛るゝのである。

(四) は‖わ‖

これは、語の中下に於て、紛れ易いものである。

(五) ふ‖う‖

これは、語の中に於てのみ、紛るゝのである。

(六) じ‖ぢ‖

これは、語の上中下共に、紛れ易い。

(七) ず‖づ‖

これも、上中下共に紛る。

國語假名遣の一般の心得

右(一)より(七)までの假名遣ひを、一々述ぶる前に、一般の心得を書いておかう。

(一)言葉の頭にある、ハ‖ヒ‖フ‖ヘ‖ホ‖の假名は、ワ‖キ‖ウ‖エ‖ヲ‖の如くには讀まず。

(二)お‖假名一語の物名は無い。又語の中下にも無い。(組合して一語の如くなつたものはこの限りに非ず)

(三)阿行のい‖え‖と、也行のい‖え‖、及び阿行のう‖と、和行のう‖とは、區別するに及ばず。

(四)濁音は、元來國語の頭に、用ゐたことは無い、されど、稀に濁音が、語の頭に附くのがある。これは、古語の清音を變へて濁り、又は語を略して、頭の清音を省いたのである。例へば、

泥(どろ)、塵(こみ)、紅(へに)　笊(いざる)の略、鰡(ぼら)の略、塲(には)の畧の類である。

(五)良行の五音は、語の頭に附かず、若しもあらば、外國語の、自然に、日本的になつたのである。

(七)すゐといふ假名はなし、故に、硯、雀、涼しなど、何れも、すゞり、すゞめ、すゞしと、心得ておくが可い。

(八)連濁音の法に依つて濁り、又二語を組み合して、波行音を和行音の如くに、云ふことあり、例へば、石摺(いしずり)、綱梶(つなかぢ)、原爪生(はらつふ)などの類である。故に、かやうな物に、假名を附けようとするときは、石●摺●綱●梶●原●爪●生と語を二つ以上に分けて見たらば、直に其の假名遣ひが、分るであらう。

(九)假名遣ひを、本當に、正さうと思ふならば、音便及び動詞の活用を、十分に心得て、おかねばならぬ。

(十)漢字で違つた字が、幾つあらうとも、國語で同じやうに譯する言葉は、大概同じ假名である、例へば終●了●畢或は岡●丘●陸は、皆をはる●をかと、書く類である。

(一)いるひの區別

語頭	中語	下語
猪豕閭(井)(幸)	參(井)　牽る(ヒキ井)(碧蹏兒(ゴ))	藍(井)　位(クラ井)　乞兒(カタメ井)　基(モト井)
井居蝟(井)(モヽ)(井ヅリ)　膝行	用る(モチ井)	紅(クレナヰ)　紫陽花(アヂサヰ)　慈姑(クワヰ)
田舍(井ナカ)　堰埭(井セキ)　(醫)(井ヤ)　堰杭(井ノビ)	以上(井)	宿直(トン井)　(たゐ)田舍のこと
敬ふ(井ヤマヒ)　(瞥)(井ヤラヒ)　尻(井シリ)　(臀)(井ル)	松明(タイマツ)　啄む(ツヾ井バム)　次(ツヾ井ギ)　及(ヤヽ井バ)	以上(井)
(斷)	蹴鞠(ケマリ)　炎(ホヽ井ト)　(隼人)(ハヤト)　(鷹)(ハヤブサ)	櫂(カヰ)　悔(クヰ)　報(ムクヰ)　老(オヰ)
(一)中にある語は今は用ゐず以下これに同じ		及さしの音便
		以上(イ)
		但し、これは、皆音便上から、イになつたものである。

右の外は、大抵、ひの假名を、用ゐること、心得てよい例へば、

戰●命●石●色などは、いくさ●いのち●いし●いろで、蠶●鶯●小さし遂になどは、何れも、かひこ●うぐひす●ちひさし●つひにと、かくやうなものである、又鴨居●敷居●居間などは、二語の組み合うたものであるから、注意せねばならぬ。

（二）ゑゐへの區別

語頭	語中	語下
繪畫　餌食　穢多　槐　萌黄　鵺		聲末　故机　杖　巴陶　坐植　飢　智惠
唉　酔　彫　吐　挽　烏帽子　鹼		
頽　禁　聆も同じ、これは、古來二説あつて、余には、定め難ぬるから、學者の數へをまつ。		

以上（ヱ）

稗　笛　楔　蟻螺　糞　入江　轅　鮠　梅が枝　甲

この外十二支の中のヱ

令へばつちのえみつのえ等

以上（ヱ）

右の外は、大抵語の頭に於てはえ、語の中下に於てはへの假名を用ゐることと、心得て可い例へば、

（榎木）枝（蝦）（蛙）遮（囀）（家）苗　鳶などの類である。されど、也行下二

段活の語を名詞とする場合はえと止むるが故に、注意すべし、例へば、生煮夕映な

（三）をおほの區別

語頭	語中	語下
荻　囲男　息女長　幼稚　治訛　拝　折節　居　可笑　過戯　老翁　致伯　父叔父　勇壯　叫　戰　終　一昨日　樞　犯　岡　遠方　踊　驕　愛惜　伯母叔母　稲　斧　折敷　韋　女郎花　食稲　多くは　歳　蛇　蜘　鴛鴦　（虻）（蠛）（蔵言）　岑　乙女　憐　慧　招　一音のを例へば男尾など		

泰　澤標　蓼　婵妍　薫　徐々　撓　紅梅　申　紫苑　（松蘰）（竹及）（襖子）（螟蛉）　（俳優）（胡）

青　功　十　魚　操　芭蕉　（水脈）　攀　（鐙鈕）　竿　松魚　大丈夫

右の外は、大概、語の頭に於ては、‖お、語の中下に於ては、‖ほの假名を用ゐること
と心得てよい、例へば、帶(オビ)・大人(オトナ)・言祝(コトホギ)・蟋蟀(コホロギ)・郡(コホリ)・顏(カホ)・鹽(シホ)などの如し。
前にも述べた通り、‖お假名一つの言葉はないから、一字の假名は、すべてを‖
思うて可い、尊ぶ言葉に、‖おと附くるけれども、これは、御(オン)の略である。

‖はわの區別

(四) ‖はわの區別

語頭	語中	語下
坐(スワル)・乾(カワク)・鰯(イワシ)・慈姑(クワヰ)・婢妍(タワヤカ)・理(アヤ)・撓(タワム)・周章(アワテ)・騒(サワグ)・諺(コトワザ)・作爲(シワザ)・弱植(ヨワル)・腸(野分)(ヘノワキ)・聲色(コワイロ)・硫黄(イワウ)・條(スワウ)・爽(サワヤカ)・俵(タワラ)・客(幼稚)(イワンヤウ)	皺(シワ)・泡(アワ)・鶉(ウヅラ)・(酒宴)(ミワ)・(輪)(ワ)・蒲團(フトン)	

右の外は、大概、‖はの假字である、例へば、苗代(ナハシロ)・河原(カハラ)・團扇(ウチハ)・庭(ニハ)などの如し、されど、和
行の變化で居る植ゑなどいふ他動詞が、居わる植わるなどのやうに、自動詞
となるときは、わの假名となる。

‖ふうの區別

(五) ‖ふうの區別

語頭	語中	語下
申(マウス)・首(カウベ)・墨紙(スミガミ)・手水(テウヅ)・詣(マウデ)・貧(ナウ)・事(コト)・箒(ハウキ)・蝙蝠(カハホリ)・直衣(ノウシ)・候(サウラフ)・香(カウバシ)・八日(ヨウカ)・漸(ヤウヤク)・設(マウケ)・葬(ハウムリ)		

これは、音便上、‖うになつたのである、故に、この外、神戸(カウベ)・妹(イモウト)などのやうに、幾つも
ある、唯、著しい例を、擧げたに過ぎないのである。又、飢う植う据うなどの如く、
下二段活の、和行の動詞は、‖うが附くことも、忘れてはならぬ。
右の外、大抵、晴(アナフエフ)・夕顏(ユフガホ)などの如く、ふ‖假名なれども、うの‖ふ假名の中に、を音のや
うに讀む、言葉があつて、うのかき方、‖は假名に紛ふ恐れあれば、次でに、其の言
葉を集めておく、尙、卷首の扇の繪に書いてある歌を、覺えておくがよい。

扇(アフギ)仰(アフク)・葵(アフヒ)・近江(アフミ)・逢身(アフル)・倒(タフス)・貴(タフトシ)・唖(オフシ)・昨日(キフ)・今日(ケフ)（棟(アフチ)）（泥障(アフリ)）

この外は、大概、ほの假名である。

(六) ヒ(ヰ)の區別

語頭	中語	語下
痔(ヂ) これは字音なれど今は元來の國語のやうになつてゐるから爰に收めたのである	鯨(クヂラ) 紫陽花(アヂサヰ) 鮹(ヲヂヤウ)	藤(フヂ) 紅葉(モミヂ) 汝(ナンヂ) 蜘蛛(クモヂ) 街(コウヂ) 氏(ウヂ) 鯵(アヂ) 味(アヂ) 梶(カヂ) 鍬(クハヂ) 筋(スヂ) 脛(ハヾヂ) 恥(ハヂ)

右の外は、大抵、ヒの假名と心得てよい、例へば、蛆(うじ)・蟇(ひきがへる)・蛭(ひる)・鍬(くはがた)・蠅(はへ)などの如し。

大抵の文典書には、ヒの假名を擧げてある、然れど、ヂ假名は、却つて、其の語數が少くて、記憶し易いから、ヂの方を示しておく。

(あさぢ)・(はなぢ)などの如く、ヂ假名の語は幾つもあるでは無いかとの、疑ひを起す人もあらうが、これは、何れも、組み合した語で、例へば、(あさぢ)は淺茅、(はなぢ)は鼻と血なれば、少し注意して、考へなば直に、分るであらう。

(七) ヅ(ヱ)の區別

語頭	中語	語下
不從者(ツヅカザルモノ)	鼠(ネズミ) イ(ねづまく)準(群集)渦卷(うづまく)なりと、いふ人もあれど黒川道祐翁の説に從つて下の部に收めた、	鴫(シヾ) 蚯蚓(ミミズ) 數珠(ジュズ) 疵(キズ) 筈(ハズ) 必(カナラズ) 葛(クズ) (唐棣花)(ハネズ) (髭華)

このヒ假名に就いて、面白い話しがある、或る大臣が、畫工の許へ、ふじの繪を書いてくれと、假名文字の手紙を遣つた、すると、畫工は、美事な富士山の景を畫いて、誇り顏に、持つて行くと、大臣甚だ立腹の体で、君は、疎忽な人である、余は、美しい藤の花を、賴んだのにと詰る、畫工、狹より、手紙を取り出して、これ御覽ぜ、ふじと書いてあらうじやせ、ふぢとお書き遊ばせば、宜かつたのに、貴殿こそ、假名遣ひを知らぬ、疎忽人なれと、大聲になりければ、大臣頭を撫でゝ、イヤハヤ、ふと(不時)な恥をうけましたと、駭汗落を言つた。

かゝる類ひの話が、この外幾つもある、證人(シヤウニン)と上人(シヤウニン)、漁人(イザリビト)と覺人(サザリビト)、居間(イマ)と今など、間違へた例は、一々述ぶるに暇がない、然るを、假名遣ひはどうでも善いと、言ふやうな人は、遠く亞弗利加の沙漠へでも、移住して貰ひたいものである。

前にも述べた如く、すづといふ假名は無いから、錫・鱸・菘など、何れも、すゞの假名である。

右の外は、大抵づの假名と、心得て可い、例へば、水・屑・泉・酸漿など、皆づであるやうなものである。

これにて、國語假名遣ひの大体を終つたが、尚、注意して貰ひたいのは、也行下二段活の動詞と、波行下二段活の動詞とを、書き紛ふことである、又、波行下二段活の語は、動もすると、ひとへとを差ふることもある、故に、更にそれらの言葉を、擧げておかう。

也行下二段活
冶 凍 冴 絕 聞 吠 覺 越 消 聳 肥 榮 殖 見 弊 煮 焚 潰
費 餧 愈 生 崩

波行下二段活
堪 答 代 終 揃 捕 添 譬 齊 唱 辨 蘯
訴 衰 貯

これを、答ひ衰ひなど、書き紛ふことがある、又、殊に注意すべきは、絕と堪とである、返す〳〵も、困難を堪へ忍びて、假名間違ひの、絕ねて無きやうにすべし。

漢字假名遣の紛れ易い者

漢字假名遣　又字音假字遣ともいふ

漢字假名遣ひも、亦、國語假名遣ひの樣に、其の假名の紛れ易い字の中、少い方を記憶し、其の多い方を、推しはかるのである、偖、漢字は、前にも述べた通り、其の數甚だ多いけれども、同じ旁扁などに依つて、大概、其の聲を、推しはからるゝものである。例へば、いとゐと紛ふとせば、少い方のゐの方の字即ち扁旁などの、異なつた種類の字を集めて、これを覺えおき、それと旁などを、同じくする字は、ゐ音で、其の他はい音であると、知るやうなものである。

漢字假名遣ひに於いて、紛れ易いのは、左の假名どもである。

(一) ゐい　＝は少い假名で－は多い假名である
(二) ゑえ
(三) おを
(四) ぢじ
(五) ずづ
(六) わう　あふ　おう　あう

(七) くわう こう かふ こふ かう
(八) きふ きう (きゆう)を(きう)と書くも妨げなし
(九) けう きよう けふ きやう
(十) ろう さふ さう
(十一) しふ しう (しゆう)を(しう)と書くも妨げなし
(十二) せふ しよう せう しやう
(十三) とう たふ たう
(十四) てう てふ ちよう ちやう
(十五) のう なふ なう
(十六) ほふ ほう はふ はう
(十七) ひよう へう ひやう
(十八) ねう よう ねふ やう
(十九) ろう らふ らう
(二十) れう りよう れふ りやう

漢字假名遣の一般の心得

(廿一) もう まう
(廿二) めう みやう
(廿三) いふ いう (いゆう)を(いう)と書くも妨げなし
(廿四) ちふ ちう (ちゆう)を(ちう)と書くも妨げなし
(廿五) ねふ ねう
(廿六) にふ にう (にゆう)を(にう)と書くも妨げなし
(廿七) りふ りう (りゆう)を(りう)と書くも妨げなし
(廿八) によう にやう

右(一)より(廿八)に至る區別を、一々述ぶる前に、漢字假名遣ひの、一般の心得を、述べてれかうと思ふ。

イ井の如く呼ぶ音は、阿列と衣列との下には、い假名が附き、宇列の下には、ゐ假名が附くことゝ、心得て可い、例へば、

愛(アイ) 皆(カイ) 京(ケイ) 清(セイ) 涙(ルヰ) 水(スヰ) などの如し。

字音の中と下とに、はわの如く呼ぶ音は、凡てわを用ゐ、はを用ゐることがない、例

へば、

化(クワ) 火(クワ) 活(クワツ) 觀(クワン) 畵(クワク) 回(クワイ) などの如し。

ガツ ザツ などの如く讀み、之を本音で、ガウ ザウの如く讀むものは、ガフ ザフの假名を、附けねばならぬことゝ、心得て可い、例へば、

合(ガフ) ガツ 雜(ザフ) ザツ などの如し、

漢音でヘイ ケイの如く呼び、呉音で、ヒヨウ キヨウの如く聞ゆるものは、凡て、ヒヤウ キヤウである、例へば、

兵(ヘイ) ヒヤウ 京(ケイ) キヤウ などの如し。

漢音で、カウ サウの如く呼び、呉言で、キヨウ シヨウの如く聞ゆるものは、キヤウ シヤウである、例へば、

梗(カウ) キヤウ 莊(サウ) シヤウ

呉音などで、コウ トウの如く聞ゆる文字が、漢音などで、キヤウ チヤウの如く聞ゆるものは、キヨウ チヨウである、例へば、

輿(コウ) キヨウ 澄(トウ) チヨウ

漢字假名遣の記憶便法

漢音で、コウ トウの如く呼ぶ文字は、呉音では、クツの如く呼ぶことあるから、呉音で、クツに呼ぶものゝ漢音の假名は、コウ トウである、例へば、

口(コウ) ク 頭(トウ) ツ などの如し。

偖、右に述べたる事どもの外、すべて、漢字假名遣ひの、記憶法とでも、名づくべき便法が五個條ある、即ち、

(一) 約音法
(二) 延音法
(三) 行通法
(四) 列通法
(五) 他音法

であるが、今一々順を追うて、左に述べよう。

約音法とは、約音の法を以て、其の假名遣ひを知る方法である、例へば、相の假名遣ひが、シヤウであることを知り居り、想の假名遣ひが、サフ サウ ソウ何れか分らぬとすれば、シとヤとを約し、サウであると、判斷するが如きをいふ、更に、是等を、例を

擧げなば、供を約して洪の假名を知り、細台を約して、亞細亞明治と書き誤らぬが如し。

延音法とは、右の反對で、延音の法に依つて、一音を二音に延ばし、さうして、假名遣を知る法である、例へば、公・豆・奉と讀むが故に、公・豆・奉と假名を附くるやうな道理である、何となれば、クツブの延音は、コウトウホウとなるからである。

但しこれは、一字で漢呉音を異にするものに、適用するのである。

行通法とは、五十音の縦の行に求めて、其の假名遣ひを知る法である、例へば、夜の音ヤ、倭の音ワイなることを、知り居れば、掖委は、ヱキイではなくて、夜行和行の通音、エキ井であると、いふことが、直に、悟らるゝやうなものである、これは、誠に、重寶な方法であるから、澤山ゐの例を擧げよう。

和行	多行
(唯・淮)	(治・台)
(畏・猥)	(尼・泥)
(遺・潰)	(柱・杜)
(域・或)	(定・定)
(院・完)	(重・動)
(員・圓)	(豆・豆)
(援・緩)	(沈・枕)
(垣・桓)	(陳・陳)
(宛・椀)	(直・直)
(園・遠)	(竺・竹)
エ回	(軸・笛)
ア會	(厨・厨)
エ穢	(圖・圖)
エ壞	(杜・土)
エ准	(豆・逗)

佐行
(壽・壽)
(從・從)
(村・寸)
(事・史)
(字・子)
(情・青)
(城・成)
(食・食)

列通法とは、五十音の横列に求めて、其の假名遣ひを考ふる法である、例へば、天の音エウ、少の音セウなることを、知り居れば、笑・秒は、セウベウであると、いふことを知るが如し、何となれば、エとセ、セとへは、互に衣列であるからである、これも、仲々ためになるものなれば、數多の例を、左に掲げておかう。

阿行	佐行	多行
(瓔・櫻)	(牀・壯)	(衲・納)
(鴨・甲)	磯・狀	(廟・朝)
(喬・夭)	(澄・證)	(傷・腸)
(翁・公)	登	(陽・湯)
松	(秒・少)	(通・用)
(鷹・應)	(超・召)	(動・重)
加行	(趙・肖)	
(造・告)	(常・尙)	其の他の列通
(梟・鳥)	當・堂	(猫・苗)
(燒・堯)	(淨・爭)	(寵・籠)
(興・興)	(像・象)	龍
(餉・向)	(從・蹤)	(陵・陸)
嚮		(祥・姜・羊)
(答・洽)		(荒・盲・亡)
		(萠・明)

他音法とは、同じ旁扁などの字が、其の音、互に異なるとき、彼に由つて此の音を推し量る法である、例へば、較の音カクなれば、校の音カウであると、考ふる類である、これも、隨分諳記を助くるものであれば、尙數多の例を出しておかう。

ウ‖ク‖
(暴・瀑)
(讀・瀆)
(悼・卓)
(岩・拓)
(勞・犖)
(澳・奧)
(貌・邈)
(嗾・族)

ウ‖キ‖
(椒・寂)
(條・滌)
(竅・激)
(溺・溺)
(釣・的)

右の五个條を辨へおかば、後の區別表を記憶する上に於いて、大いに、助けとなるであらうと思はる、又、これを能く悟つて居れば、我が國關東邊で誤るクワカの區別も、大方は分るであらう、何となれば、院の音ヰン、回の音ヱなれば、完の音クワン、回の音クワイと讀まねばならぬ道理であるからである、尙、例をあぐれば、

完—元　和—禾　或—摑　廣—擴　話—活　畫—劃　などのやうな道理である。

(一) ゐいの區別

ゐ‖
位　威　畏　恚　尉　委　域　院　員　彙　唯　韋　遺　爲

字列の下につくゐ例へば類水などの如し。

右の外は大抵いの假名と心得て可い。

(二) ゑゑの區別

ゑ‖
淮　慧　會　術　惠　穢　回　垣　圓　援　宛　遠　越　曰　淵

右の外は大抵えの假名と心得て可い。

(三) おをの區別

を‖
温　膃　越　嗚　汚　遠　怨

右の外は大抵おの假名と心得て可い。

(四) ぢじの區別

ぢ‖
治　地　持　直　陣　衂　辱　尼　軸　重　定　孃　住　除　頭　塵　女　杼　痔　除　昵　丈　沈

右の外は大抵じの假名と心得て可い。

(五) づずの區別

ず　瑞(ズヰ)　從(ズ)　隨(ズヰ)　數(ズ)　蘂(ズヰ)　寸(ズン)

右の外は、大抵づの假名と心得て可い。

(六) わうあふおうあうの區別

わう　王(ワウ)　黄(ワウ)

あふ　押(アフ)

おう　翁(オウ)　應(オウ)　歐(オウ)

右の外は、大抵あうの假名と心得て可い。

(七) くわうこうかふこふかうの區別

くわう　皇(クワウ)　荒(クワウ)　宏(クワウ)　光(クワウ)　弘(クワウ)　轟(クワウ)　廣(クワウ)

こう　降(コウ)　后(コウ)　孔(コウ)　工(コウ)　溝(コウ)　興(コウ)　公(コウ)　口(コウ)　厚(コウ)　侯(コウ)　勾(コウ)　巷(コウ)　後(コウ)　寇(コウ)　薨(コウ)

かふ　甲(カフ)　合(カフ)

こふ　劫(コフ)　業(コフ)

右の外は、大抵かうの假名と心得て可い。

(八) きふきうの區別

きふ　泣(キフ)　及(キフ)　給(キフ)　急(キフ)

右の外は、大抵きうの假名と心得て可い。

(九) けうきようけふきやうの區別

けう　梟(ケウ)　敎(ケウ)　堯(ケウ)　竅(ケウ)　叫(ケウ)

きよう　凶(キヨウ)　共(キヨウ)　兢(キヨウ)　恐(キヨウ)　凝(ギヨウ)　興(キヨウ)

けふ　怯(ケフ)　俠(ケフ)　協(ケフ)　業(ケフ)　脅(ケフ)　刧(ケフ)　叶(ケフ)

右の外は、大抵きやうの假名と心得て可い。

(十) そうさふさうの區別

そう　叟(ソウ)　宗(ソウ)　蹤(ソウ)　藪(ソウ)　叢(ソウ)　嗽(ソウ)　曾(ソウ)　送(ソウ)　雙(ソウ)　奏(ソウ)　總(ソウ)　匆(ソウ)　走(ソウ)

さふ　匝(サフ)　挿(サフ)　雜(ザフ)

右の外は、大抵さうの假名と心得て可い。

(十一) しふしうの區別

しふ　習(シフ)　執(シフ)　十(シフ)　集(シフ)　澁(シフ)　輯(シフ)　襲(シフ)　拾(シフ)

右の外は、大抵しうの假名と、心得て可い。

（十二）せふしようせうしやうの區別

せふ　捷攝涉妾

しよう　松誦承竦鐘舂升冗剩茸乘繩稱聳承勝證

せう　肖擾召繞燒鰌焦椒蕭

右の外は、大抵しやうの假名と、心得て可い。

（十三）とうたふたうの區別

とう　冬東同藤投兜鬪桶統董動透豆等燈騰

たふ　榻答納沓

右の外は、大抵たうの假名と、心得て可い。

（十四）てうてふちようちやうの區別

てう　趙兆調朝鳥釣條肇弔

てふ　蝶疊帖

ちよう　重徵寵冢

右の外は、大抵ちやうの假名と、心得て可い。

（十五）のうなふなうの區別

のう　農能

なふ　納

右の外は、大抵なうの假名と、心得て可い。

（十六）ほふほうはふはうの區別（ほふははふの呉音也）

ほう　封蒙剖奉曹牟某逢豐鳳朋厖冐矛

はふ　法乏

右の外は、大抵はうの假名と、心得て可い。

（十七）ひようへうひやうの區別

ひよう　氷憑

へう　豹表票秒苗廟

右の外は、大抵ひやうの假名と、心得て可い。

(十八) ねうようねふやうの區別

ねう 夭幼杳謠要曜

よう 雍用孕容庸蠅

ねふ 葉靨

右の外は、大抵やうの假名と、心得て可い。

(十九) ろうらふらうの區別

ろう 樓籠弄漏陋

らふ 拉蠟

右の外は、大抵らうの假名と、心得て可い。

(廿) れうりようれうりやうの區別

れう 寥了聊療料

りよう 陵龍

れふ 獵

右の外は、大抵りやうの假名と、心得て可い。

(廿一) もうまうの區別

もう 蒙

右の外は、大抵まうの假名と、心得て可い。

(廿二) めうみやうの區別

めう 妙苗

右の外は、大抵みやうの假名と、心得て可い。

(廿三) いふいうの區別

いふ 邑揖

右の外は、大抵いうの假名と、心得て可い。

(廿四) ちふちうの區別

ちふ 蟄

右の外は、大抵ちうの假名と、心得て可い。

(廿五) ねふねうの區別

ねふ 捻

右の外は、大抵ねうの假名と、心得て可い。

（廿六）にふにうの區別

にふ　入（ニフ）

右の外は、大抵にうの假名と、心得て可い。

（廿七）りふりうの區別

りふ　立（リフ）

右の外は、大抵りうの假名と、心得て可い。

（廿八）にようにやうの區別

によう　女（ニヨウ）

右の外は、大抵にやうの假名と、心得て可い。

練習問題三

（一）國語假名遣を知る方法に幾種類あるか、且、其の優劣を批評せよ。

（二）左の文字の國語假名を附けよ。

屑、葛、酸漿、煩、上積、錫、鈴虫、餅好、躑躅、交る、捻る、味（はい）（わひ）（何れか）衄、麴、可愛（かゝ）し、弱（ひ）（い）人、雞、膓、眞綿、聲色、尾張、遠江、小野、鴛鴦、鼻緒、終、祖父、潮は鹽水、魚釣には竿がいる、鰹節、植木、蝦夷、箙、楓、笛の聲、長柄、壬、飢死、覺書、費、沸湯、勢、長く井端に居ると冷ます、紫陽花、御出になつた序に幸鯛でも煮ませう、碓氷峠、八日の夕、申候、神戸の商人、手水鉢、近江、斃る、元結、

（三）左の文字の音を附けよ。

東京、彙集、寺院、回向、法會、鴛鴦、講演、艶影、掃除、塵埃、孃、讓、辱、女、饅頭、醉興、花蘂、伊豆、坊主、人參、十圓、入道、牛乳、重疊、英雄、邑、朋友、習字、弘法、宏壯、興行、孝行、唐宋、老叟、鬪爭、投票、等級、同意、童幼、堂塔、燈明、勝敗、鳳凰、毛頭、玩弄、

蒙、毛、孟、三郎、老、勞、陋、樓、蟻、雜炊、答、藤、暴、亡、杳渺、要求、容貌、笑靨、教育、召喚、園繞、清淨、億兆、醫業、茫洋、町長、提燈、獵銃、蕭條、集合、出入、公侯、

(四) 國語假名遣の、一般の心得を記せ。

(五) 漢字假名遣の、約音法と延音法とを、例を擧げて、說明せよ。

(六) 行通法●列通法●他音法を說明し、本書外の例、各三づゝ擧げよ。

(七) 紛れ易い假名ばかりで、和歌を作れ。

(八) 紛れ易い假名で、お伽ばなしを作れ。(但し五十字內外のもの)

(九) 左の字の、漢字假名遣を、忘れたとき、何うして、思ひ出すか。

孔、水、尼、竺、圖書、校、豆、情、暴、音、釣、

(十) 音便と假名遣との、關係を言へ。

國語品性の總論

我が國の言葉を、左の如く、大別することが出來る。

不變形語　變形語

或は又、次の樣に、別くるも可い。

獨立語　附屬語

不變形語とは、何うしても、其の形が變らぬ言葉である。例へば、

紙　墨　僕　君　一つ　二つ　必ず　速に　且　又

變形語とは、其の用ゐ樣によつて、其の形が變る言葉である。例へば、

書く　磨る　善し　惡し　べし　なり

なぞの如し。

獨立語とは、其の言葉に、意義あつて、單獨に、用ゐらるゝものである。例へば、右の

紙　墨　僕　君　一つ　二つ　必ず　速に　且　又

あゝ　書く　磨る　善し　惡し

などの樣なものである。

附屬語

附屬語とは、單獨に用ゐられないで、必ず、他の言葉に、附屬して、其の用をなす言葉である。例へば、右の

かな　は　に　を　て　いや　さ　べし　なり

などの類である。

品詞

偖又、言葉の成分上から、成丈、細かに、區別すれば、左の十一種となる、うの一つ〳〵を名づけて品詞といふ。

名詞　代名詞　數詞　副詞　接續詞　感嘆詞　動詞　形容詞　助動詞　助辭　接辭（動詞の動と助動詞の働とを混同してはならぬ　其の理由は後に能く分る）

この十一種を、前のに當て嵌むれば、左の如くになる。

不變形語〔名詞　代名詞　數詞　副詞　接續詞　感嘆詞　動詞　助辭　接辭〕

變形語〔動詞　助動詞　形容詞〕

名詞

名詞とは、形の有ると無いとに拘らず、すべて、物の名を、あらはす言葉である。例へば、

硯　筆　霞　氷　舞　歌　赤　白　伊藤博文　富士山　心

空氣　松風　友達　梅が枝　君が代　風車　春霞　琴歌　細道

書取　厚着　植木　祝ひ歌　議論　七草　薄赤　湯桶（ユトウ）　重箱

吊りランプ　さゝ夜　白菊　下べ　一　十　悲しさ　青み　重箱讀み

にこ〳〵顏　猫撫聲

などの類である。

代名詞

代名詞とは、物の名に、代へて用ゐる言葉をいふのである。例へば、

私　あなた　彼　だれ　これ　此處　あちら　今日　此の　彼等

手前　小生　足下

などの如し。

數詞

數詞とは、物の數を、あらはす言葉である。例へば、

筆二本　饅頭三つ　鳥四羽　犬五疋　紙十枚

などの二本三つ四羽五疋十枚である。

注意　只單に二・三・四・五・十・といへば、數の名となるから、名詞である、けれども、右の樣に、物の數を表はす以上は、これを數詞といふ、間違へてはならぬ。

動詞

動詞とは、凡て物の動作を、いひ表はす言葉である、例へば、

敲く　戰ふ　着る　煮る　蹴る　受くる　設くる　論ずる　爲る

有り　異なり

などの如し。

形容詞

形容詞とは、すべて、物の有樣を、あらはす言葉である。例へば、

苦き藥　新しき着物　かう〳〵しき人　いさましき軍人　のどけき天氣

しふねき心

の――印のやうなものである。

助働詞

助働詞とは、動詞、形容詞などの意義の、十分ならぬものに添へて、其の意義を分るやうにし、又、其の用ゐやうに依つては、其の形が、變るものである。例へば、

雨降りぬ　風吹くまじ　花咲きけり　正成は忠臣なり

などの――印の如し。

助辭

助辭とは、名詞、代名詞などに添へて、其の前後の關係を明かにし、又、其の意義を分るやうにし、さうして、何う用ゐても、其の形が、變らぬものである。例へば、

正成は忠臣なり　雨が降る　上野に遊びて花を見る　君此頃達者なりや

何といふ花か

などの――印の類である。

副詞

副詞は、動詞、形容詞、又は、他の副詞の上に附けて、それらの意味に、或る制限を、與ふるものである。例へば、

爰に　明かに　先づ　聊か　漸く　決して　愈　尙　却つて

ひとり　必ず　さつぱり　むつと　がら〳〵　矢張

などのやうなものである。

接續詞

接續詞とは、二つ以上の語句を、結び續くるために、用ゐる言葉である。例へば、

字を書き、且、本を讀む。動詞及び形容詞を覺え、さうして後、副詞を覺ゆるが可い。自分の損となる、のみならず、親の耻となる。御待申居候間、御越被下度。此の場所へ入るべからず、但し、許可を得たる者は此の限りに非ず。

などの――印あるものゝ類である。

感嘆詞　感嘆詞とは、喜、怒、哀、樂、及び、驚きなどの、感情をあらはす言葉である。例へば、

おやまあ　あゝ　それ　いざ

などの如し。

接辭　接辭とは、名詞、代名詞、及び、動詞、形容詞などの、首或は尾に附けて、其の語氣を強め、或は、語調を助くる言葉である。例へば、

|た易し　|か細し　取|り亂す　|もて噺す　二|つ　三|つ　あなた|がた　私|ども

などの——印の類である。

右にて、國語品詞の、大意を述べたれば、次に、漢文品詞の分別に移つて、其の大體を說かう、尙、夫等の詳しい說明は、後の章に話すとしよう。

漢文品性の總論

漢語を、左の如く、大別することが出來る。

獨立語　附屬語

獨立語とは、國語のと同じく、其の語に、意義あつて、單獨に、用ゐらるゝものである。例へば、

草木　余　汝　千萬　尊　幸　落　啼　赤　白　故　即　嗚呼　嗟

附屬語　附屬語とは、これも、國語のと同じく、單獨に用ゐられないで、他の語に附屬して、其の用をなすものである。例へば、

之＝の意　於＝の意　矣　歟　焉　不　可

などの如し。

漢語は、如何なる場合に用ゐても、其の語尾が、變らぬものである。其の事の、過去か未來かなどを、判別するには、唯、前後の關係に依つて、知るのみである。

今漢語を、國語を區別したやうに、其の成分上から、成丈細かく分けて見ると、大抵、左の十一種となる、さうして、其の一つ〳〵を、品詞と名づくることは、國語に同じ。

名詞　代名詞　數詞　副詞　動詞　形容詞　接續詞　感歎詞　挿入詞　助働詞　助語

これらを、獨立附屬の二大別に、附屬せしむれば、左の如くなる。

獨立語 ┌名詞　代名詞　數詞　副詞　接續詞
　　　 └動詞　形容詞　感歎詞
附屬語 ┌挿入詞　助働詞
　　　 └助語

名詞

名詞の解、國語と同じ、今、其の例を擧ぐれば、

義經至二八嶋一縱レ火　高松城一　草木之無レ聲風動レ之則鳴　以二井上馨一爲二全權大使一　先二親之憂一而憂、後二親之喜一而喜　以レ某爲二第一優等者一　彼容止甚卑　昔有二子規一者一　向來誰知己　京城周回八十里

なぞの——印の類である。

代名詞

代名詞も、亦、國語と、同じ道理である。尚、其の例を擧ぐれば、

責レ己而後及レ人　余豈怠惰哉　民之富即朕之富也　彼實英雄也　何所一　叔中誰可レ爲二組長一乎　頼員謂レ妻曰吾與レ汝綢繆既經二三歲一吾死之後堅持二貞心一要怪問レ之　女爲二君子儒一　吾子之輩作二漢文一未矣

數詞

數詞も、亦、國語のと異ならず。例へば

身長六尺餘　京城周回八十里　富士山千仞削成　十有五而志二于學一　琵琶湖其周圍七十三里餘

動詞

動詞は、凡て、物の動作を、言ひあらはす語であることは、國語と同じけれども、其の形が、如何なる場合に用ゐても、變らぬのは、大いに、國語と、趣きを、異にしてゐる。尚、後の章に說くところを見て、能く悟るが可い。今一例を擧げて、其の區別を示せば、

國語——字を書かん　字を書きて　字を書く　字を書けば　字を書け

漢文——書字　書字　書字　書字

のやうなものである、前にも述べた通り、漢文は、唯、其の前後の關係に依つて、其の眞の意味を悟るのである。今尚、漢文の例を擧ぐれば、

學藝過人　月落烏啼霜滿天　我兵與清兵戰清兵惶懼而敗走
誘友遊公園　西鄉隆盛背叛

形容詞

形容詞も、亦、漢文の動詞が、國語のに於ける關係と、同じ道理である。今、例を擧ぐれば、

赤甲而黃馬者重盛也　白雪皚々數萬項　好男子惜不知兵法
卑怯策可憎矣　短身涅齒　人身而獸心　原田重吉先衆兵開玄武門

副詞

副詞は、國語と同じ關係である。例へば、

切爲君諫　專留心學事　優出人意表　彼實勉强家也　必勉
汝決勿忘　幸生治世周得讀天下之書

接續詞

接續詞も、國語と同じ道理である。例へば、

十有五而志于學　教育盛則國富　賦詩且作文　河海不擇細流故大
周公曰天子不可戲乃封小弱弟於唐

感歎詞

感歎詞も、國語のと少しも異ならず。例へば、

唉豎子不足與謀　嗚呼此其所以爲豪傑歟　嗟乎子之言是也
噫小人可恐

挿入詞

挿入詞は、國語のテニヲハと、略同じ道理のものである。例へば、

義經自間道攻之　墜於馬　十有五而志于學　清風從窓來
道莫大乎仁義　天下之學者　君與僕金蘭之友也

助語

助語とは、語の終りに附けて、其の語の意味を、全からしむるものである。例へば、

正成忠臣也　君言則然矣　彼實可謂大丈夫矣　余唯勉强耳　始可與明志
也已矣　誠可哀也夫　其在斯人歟　將來益勉乎哉　君學文典乎
足數及門而不知止焉

助働詞

助働詞とは、動詞、形容詞などの意義が十分ならぬものに添へて、其の意義を分るやうにすることは、國語の助働詞と、異なることなけれども、國語の樣に、其の形を變へぬのが、大いに趣きを變へてゐる。例を擧ぐれば、

不責人責己　汝欲爲豪傑盍勉强（盍は何不の意なり尙詳しいことは後の章に說かう）
遂爲伏兵所殺　女可勉强

挿入詞を助辭とし、助語を接辭としたらば善からうとの、疑ひも起らうが、併し、大いに、國語とは、異なる點もあるから、態々名を變へたのである。尙、詳しく各論に說くと

しよう。

注意　漢語は、前後の關係に依つて、其の意味を異にするといふことを、忘れてはならぬ、唯に、動詞形容詞などの、形を變へぬのみならず、同じ語が、其の用ゐやうによつて、色々の品詞となる、例へば、之、切、乎などの語は、何品詞かと尋ねるものが有つても、答ふることが出來ぬ、何となれば、ノ キル カの意味に取れば、挿入詞動詞助語となり、コレ セツニ ヨリの意味に考ふれば、代名詞副詞挿入詞となるやうな道理であるからである。

今までの文典學者は、一般に、助動詞と書いたけれども、敢て、動詞のみを、助くるものでないから、余は、助働詞と、改めたのである。

練習問題四

(一) 國語を、如何樣に大別するか、例を擧げて說け。

(二) 名詞と、數詞との、關係を言へ。

(三) 助働詞は、如何なるものかを定義し、且、例を擧げよ。

(四) 國語の品詞に、幾種類あるか、且、本書外の例、二つ宛を擧げよ。

(五) 左の語句に、悉く、品詞を附けよ。

勤勉は、幸福の母なり。　口は、禍の門である。

君は、人を恤むならば、人も、亦、君を恤むであらう。

すべて、人と話をするには、彼をして、其の長所を、說かしむるが可い、我に於て益がある。

名を成すは、毎に、窮苦の日に在り、事を破るは、多く、得意の時に因る。

東京名物、七色雜りの唐辛、滅法に高いは五重の塔、鳩ぽつぽに、飛んだり跳ねたり、はじき豆。

人を識らば、人亦、吾を識らんこと。

べしといふ語に、二つの意味がある、一つは、命令の意を顯はすもので、一つは、推量の意を示すものである。

(六) 漢語を、如何に大別するか、例を擧げて述べよ。

(七) 漢語の品詞に、幾種類あるか、各、例を擧げて說けよ。

(八) 漢語の動詞形容詞と、國語の動詞形容詞との、異同を詳にせよ。

(九) 挿入詞助語は、國語の何に當るか、及び、其の異なる點を言へ。

(十) 左の語句に、悉く、品詞を附けよ。

番場、醒井、柏原、不破の關屋は荒れ果てゝ、猶もる物は秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、墟干に今や鳴海潟、傾く月に道見ゐて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕墟に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀れと夕暮の、晩鐘鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

けるかなと、詠まれけるかなに、適はぬけるも、詠まれけるかな。

辨慶者義經之臣也

地球一塊物何必論東西

誰謂仙境在理外奚知理境是仙境

必欲窺而翁幸分我一杯羹

王孫賈從潛王於莒失王處其母曰汝朝出而晚來吾則倚門而望汝暮出而不還吾則倚閭而望

誰謂覩海小也其水溺漫千里無際矣

正成之先出左大臣橘公世居河內金剛山下宅西多楠樹因以氏焉之綱謂藤吉郎曰汝本國所用甲冑其製如何

日野資朝避雨東寺門有乞兒多聚其側佝僂短矮手足攣拳無一全者始見頗奇之須臾醜穢可厭歸則平常所愛盆樹屈幹縮枝如寺門乞兒俄命盡棄之曰那復愛似夫乞兒者耶

晉李絡秀田家女也安東將軍周凌嘗出獵值暴雨避于絡秀之家會其父兄不在女聞外有貴人與一婢於內宰赭羊作數十人飲食事々精辨不聞有人聲

浚使ニ人密覘レ之獨見ニ一女子ノ狀貌非レ常因求爲レ妻生ニ周顯兄弟一竝列ニ顯位一

嗚呼吾レ年既ニ三十有五落ニ魄江湖ニ一事無レ成實可レ歎哉今著ニ此和漢文典ニ可ニ聊

以テ足レ雪ニ其恥一乎

國語品性の各論

前の章に於て、國語の品性を、聊か論じたれをも、これは、眞の大意に過ぎざれば、今又重ねて、其の一品詞一品詞に就いて、詳しく論じようと思ふ。されど、我が國の文法は、西洋文法の如くに、其の名詞・代名詞・副詞・接續詞なをは、左程大切なもので無いから、余は今、極めて要用なる、動詞・形容詞から述べて、順々に、夫等に說き及ぼす方が、却つて正當で、而も、初學の人の爲には、可からうと信ずるのである。

動詞は、其の用ゐ方に依つて、其の言葉の形を變ずるものである、これを、其の言葉の活用といふ、さうして、其の變らぬ部を語根と云ひ、其變ずる部を語尾といふ。例へば、

本を　よまん（讀まう）　よみテ　よむ　よめバ
朝　おきズ　おく　おくル
夜　あけテ　あくレバ

などの、よおあが語根で、まみむめきくけくが語尾であるやうなものである。

右の活用する仕方を、大いに別てば、正格變格の二通りになり、細かく別くれば、四段

活用の種類

活用と語根語尾

活・伊段活・衣段活・伊宇段活・衣宇段活・加行變格活・佐行變格活・奈行變格活・良行變格活の九種となる。即ち左の如し。

正格
- 四段活
- 伊段活
- 衣段活
- 伊宇段活
- 衣宇段活

變格
- 加行變格活
- 左行變格活
- 奈行變格活
- 良行變格活

正格變格の解

正格とは、其の活用をなす言葉が甚だ多くあるところより、附いた名で、變格とは、少ない點から、附いた名であらう。或る學者は、かうも說く、正格とは、語尾變化の規則が正しいもので、變格とは、その語尾變化の規則が、錯雜なものであると、けれども、箇樣な論は、能く其の活用が別つてから、銘々に、判斷する方が善いと思ふ。

四段活とは、五十音圖の於列を除き、他の阿伊宇衣の四列にわたつて、活用するものである、さうして、これに屬する言葉は、加左多波麻良の六行で、他の四行にはない。尙例を圖に作つて、左に示さう。

伊段活

	阿列	伊列	宇列	衣列	於列
加行	か	き	く	け	○
左行	さ	し	す	せ	○
多行	た	ち	つ	て	○
波行	は	ひ	ふ	へ	○
麻行	ま	み	む	め	○
良行	ら	り	る	れ	○

伊段活とは、五十音圖の、伊列にるれの添はつて、活用するものである。これに屬する言葉は、加奈波麻也和の六行である。即ち左圖の如し。

注意　るれの二音は、唯、添ふるので、活用では無い、間違へてはならぬ。さうして、正格活用言には、四段活用言の外は、凡て其の下に附くが通則である。從來の文法家は、之を上一段活といつたのを、余は改めて、伊段活と名づけたる理由は、阿列こそ上段なれ、この活用は、伊列であるからである。

（私見）

衣段活（私見）

	阿列	伊列	宇列	衣列	於列
加行 着	○	き きる きれ	○	○	○
奈行 煮	○	に にる にれ	○	○	○
波行 干	○	ひ ひる ひれ	○	○	○
麻行 見	○	み みる みれ	○	○	○
也行 鑄	○	い いる いれ	○	○	○
和行 居	○	ゐ ゐる ゐれ	○	○	○

衣段活とは、五十音圖の衣列一段に、るれの添はつて、活用するものである。これに屬する言葉は、加行のみである。これも、從來下一段活と呼び來たのを、余が改めた理由は、下と云へば、於列になるからである。

	阿列	伊列	宇列	衣列	於列
加行 蹴	○	○	○	け ける けれ	○

伊宇段活（私見）

伊宇段活とは、五十音圖の伊列宇列の二段に活き、さうして、宇列にるれが添はるものである。これに屬する言葉は、加左多波麻也良の七行である。これも從來は、上二段活と云つたのを、余の改めた理由は、上二段と云へば、阿伊の二段になるからである。

	阿列	伊列	宇列	衣列	於列
加行 活イ	○	き	く くる くれ	○	○
左行 掘コ	○	じ	ず する ずれ	○	○
多行 朽	○	ち	つ つる つれ	○	○
波行 強シ	○	ひ	ふ ふる ふれ	○	○
麻行 試	○	み	む むる むれ	○	○
也行 老	○	い	ゆ ゆる ゆれ	○	○
良行 下オ	○	り	る るゝ るれ	○	○

衣宇段活（私見）

衣宇段活とは、五十音圖の衣宇二列に活き、さうして、宇列にるれの添はるものである。これに屬する言葉は、甚だ多くて、五十音圖の各行にある。これも從來下二段活と

呼び來つたのを、余の改めた理由は、下二段と云へば、衣列於列を指すことになるからである。

	阿列	伊列	宇列	衣列	於列
阿行得	○	○	うるうれる	え	○
加行助	○	○	くくるくれる	け	○
左行失	○	○	すするれる	せ	○
多行育	○	○	つつるつれる	て	○
奈行重	○	○	ぬぬるぬれる	ね	○
波行数	○	○	ふふるふれる	へ	○
麻行始	○	○	むむるむれる	め	○
也行覚	○	○	ゆゆるゆれる	ね	○
良行紛	○	○	るるるれる	れ	○
和行植	○	○	うるうれる	ゑ	○

注意　この活用に屬する語を、動もすれば、衣列にるれを添へて、數へる覺えるなど書いて、怪まぬ人がある。けれども、大いに、我が國の文法を破ることであるから、極めて、注意すべきことである。

この頃、言文一致論が、盛んになつて來て、遂に、衣宇段活を廢して、衣一段活と合併すれば可い、といふ人もある。成程多數の人は、普通の言語に、衣宇段活の語を用ゐぬかも知れぬ、けれども、仲には、正しく、衣宇段活の語を、使つてゐる人もある。如何に、多數の人が、用ゐたとて、我が國の言葉の、成り立つた自然の法則を、今急に廢したならば、教育上、甚だ、困難を惹き起すことであらう。余は言文一致論に、兩手を擧げて、贊成するものなれど、言葉の正不正、或は、下卑優美に拘らず、何でも、多數に從うて、車夫的の言語を普及しようといふことは、絶体的に反對である。尚、これらの意見は、はしがきに書いてあるから、能く讀んで貰ひたいものである。

加行變格活とは、五十音圖の、エ列伊列宇列の三段にわたつて、言葉の形を變化し、宇列にるれを添ふるものである。さうして、これに屬する言葉は、加行のみで、而も、「來」と

いふ一語あるのみである。これを變格といふ理由を、從來の文法家は、「くる」と活用するは、四段の活き樣、「くるれ」と活用するは、伊字段の活き樣、さうして更に於列に活用するからである。」と、參考までに、記しておく。

左行變格活

	阿列	伊列	宇列	衣列	於列
加行 來	○	き	く（くる）	○	こ

左行變格活とは、五十音圖の、衣伊宇の三列にわたつて、語形の變化し、さうして、宇列に、「るれ」を添ふるものである。これに屬する言葉は、佐の一行で、我が國固有の語では、爲●坐の二語あるのみである。されど、外來の語、及び、不變形語を改めて、活用言にしたものなどは、皆、この活用に、從ふのである。これを變格といふ理由を、從來の文法家は、「しすと活用するは、四段の活き樣、せするすれと活用するは、衣宇段活の活き樣なればなり。」と、これも、參考までに、記しておく。

奈行變格活

		阿列	伊列	宇列	衣列	於列
左行	國語 外來語 不變形語 爲 學問 書取	○	し	す（する） すれ	せ	○

注意　從來の文法家は、「語尾の變化するものを活用言といふ。」との定義を下した、これに依れば「來」「爲」などは、語尾のみでなく、語根といふべき部分までも、變化するものは、活用言に非ずと、言はねばならぬ、これ誠に、不合理な定義である。故に、形の變るものをと。改めねばならぬ。

奈行變格活とは、五十音圖の、阿伊宇衣の四列にわたつて、語形が變化し、さうして、宇列に、「るれ」を添ふるものである。これに屬する言葉は、奈の一行である。これが變格たる所以を、從來の文法家は、「なにぬねと活くは、四段の活き樣、にぬねるぬれと活くは伊宇段の活き樣である。」と。

		阿列	伊列	宇列	衣列	於列
奈行	死	な	に	ぬ（ぬる ぬれ）	ね	○

良行變格活

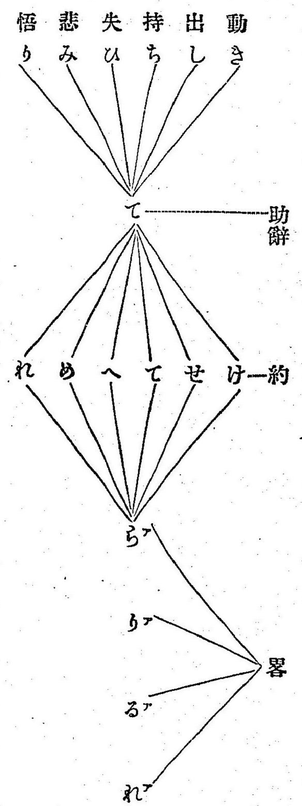
良行變格活とは、阿伊宇衣の四列にわたつて、語形が變るもので、四段活と異るところ無きやうにあれども、其の伊列の言葉が、四段活のは、文の結尾とならぬけれども、この活用言に於ては、結尾となるからである。尚、詳しいことは、後に至つて解かう。但し、これに屬する言葉は、良行のみである。

良行變格活の別格

		阿列	伊列	宇列	衣列	於列
良行	有	ら	●り	る	れ	○

この良行變格活に、別格がある、それに又二通りある、それは、四段活の語が、このありに連合して活くものと、形容詞の語が、矢張ありに連合するのとある。形容詞の方は其の章に讓つて、今は四段活と連合するものを述べよう。即ち四段活の、きしちひみりの音に、ての助辭がかゝつて、良行變格のありといふ言葉に、うつりはたらくので

ある。例へば、動きてあらん●動きてありといふを、そのきてが約つて、あの省かれ（略音部參照）動けらん●動けりと、活用するが如し。尚、圖を以て示さう。



これを、更に正圖に改むれば、左の如し。

動けら△　動けり　動ける　動けれ△
出せら△　出せり　出せる　出せれ△
持てら△　持てり　持てる　持てれ△
失へら△　失へり　失へる　失へれ△

悲めら△　悲めり　悲める　悲めれ△

悟れら△　悟れり　悟れる　悟れれ△

注意　この活き様は、四段活の動詞に限ることである。然るを、動もすれば、衣宇段活の言葉をも活かせて、失せり覺ねり植ゑりなど、かく人がある。これは、何れも、失せたり覺ねたり植ゑたりなど、書かねばならぬのである。詳しきことは、後に言はう。

偖、右にて、略、動詞の形を、變化することを述べたが、これは、仲々、日本文法に於いては、大切なものである、故に、其等の例を、次に、數多出して、學ぶ人の、練習用に、供へようと思ふけれども、その外に、尚まだ、澤山言葉がある、併し、餘り古めかしいのは、左程の益も無いと思ふから、近世以來の丈を、書いたのである。返す〳〵も、色々の言葉を取り出して、これが何活用になるかと、自問自答し、さうして後、次の活例によつて、判斷するが可い、一つも、誤らぬやうになつたならば、國語文法の半部を、卒業した人と、見做しても宜しい。

動詞活例

四段活の部

平假名は清音で片假名は濁音なり

四段加行

加行

あく(明)　ありく　あるく(歩)　あばく(發)　あく(飽)

あざむく(欺)　アフグ(仰)　アヘグ(喘)つかれてつく息のはげしくなるをいふ(イキ)

いたゞく(戴)　いたづく(勞)懇切にすることなり　いく(生)　いなゝく(嘶)

いだく(抱)　いつく(齋)あがめまつるなり　イソグ(急)

うごく(動)　うづく(疼)ひゞきて痛むことなり　うずまく(渦卷)　うく(浮)

うそぶく(嘯)口をすぼめて口笛をふくことなり　うめく(呻吟)　うなづく(點頭)　ウスラグ(薄)

おもむく(趣)　おく(置)　おぼめく(朦朧)ほのめくなり　おごろく(驚)

オヨグ(游)
かづく(被)かしらよりかぶすなり　かく(搔)　かしづく(崇)大切に事ふるなり　かわく(乾)
かく(書)　かたぶく(傾)　かゞやく(輝)ひかること又はつかしきことにもいふ　カシグ(炊)
カグ(嗅)
きしめく(轟)　きづく(築)　きらめく(耀)ひかりかゞやくなり　きく(聽)
くごく(口說)　くく(漏)漏ること又ぬひめの見えぬやうに縫ふことにもいふ　くるめく(眩)くる〳〵と廻ることなり　くだく(碎)
クツログ(寬)
コグ(漕)
さゝめく(囁)　さく(裂)　さく(咲)　サヽヤグ(私言)
サワグ(騷噪)　サワヤグ(爽)さわやかになることなり

百三十

しはぶく(咳)せきをすることなり　しく(敷)　しりぞく(退)　しぞく(退)
シノグ(凌)
すく(耕)　すく(好)　すだく(集)むらがることなり　すく(透)
スヽグ(灌)
せく(塞)ふさぎ止むるなり　セメグ(鬪)互に責めあひて爭ふことなり　ソヽグ(灌)　ソヨグ(戰)そよめくにおなじ
ゐよめく(動搖)そよ〳〵と音なふことなり　ゐむく(背)
ソグ(殺)
たなびく(棚引)　たく(燒)　たゝく(敲)　タヲヤグ(窈窕)
タヒラグ(平)
つらぬく(貫)　つく(付)　つゝく(啄)　つまづく(蹶)

百三十一

つく(突)　つぶやく(呻)　つゞく(續)　ツナグ(繋)

とゞろく(轟)　とく(解)　ところ〳〵(蕩)ところなることなり　とづく(嫁)

トグ(研)　なびく(靡)　なく(泣)　なまめく(妍)　なげく(歎)

ナグ(和)　ぬかづく(叩頭)　ぬく(抜)　ヌグ(脱)

ヲグ(祈)　のぞく(覗)　のぞく(除)　のく(退)

はぶく(省)　はく(吐)　はるく(遣悶)心をはれやかにすることなり　はじく(弾)

はく(掃)　はたゝく(霹靂奮)雷のはたゝくことひゞくことゝ又鳥の翼を折ちふることにもいふ　ハグ(剝)

ひざまづく(蹲踞)　ひらく(開)　ひく(引)　ひゞく(響)

ひらめく(閃)　ひしめく(犇)ひしくとさすることなり　ヒシグ(拉)おしつぶす或はおしくだくなり

ふゞく(吹雪)　ふく(拭)　ふく(吹)　フセグ(防)

フタグ(塞)　フサグ(塞)

ホグ(祝賀することなり)

まねく(招)　まく(捲)　まく(蒔)　マジログ(瞬)

みちびく(導)　みがく(磨)　ミツグ(貢)民の年々その高を定めて政府へ奉ることゝ又たすくゝしおくりすの意にも用ゐる

むく(向)　みづくく(水漬)

やく(焼)　ヤハラグ(柔)

ゆく(行)　ユラグ(動搖)

よく(避)

わな〳〵く(戰慄)　わく(沸)

エラグ(咲笑)笑ひたのしむことなり

をの〳〵く(戰慄)　ヲグ(招)まれさ寄することなり

左行

あます(餘)　あかす(明)

いだす(出)　いかす(令活)

いたす(致)

うるほす(潤)　うかす(令浮)

あらはす(顯)　あそばす(遊)

います(坐)　いうがす(令急)

うつぶす(俯)うつぶくに同じ　うつす 移

わく(分)　ワカヤグ(若)

うもらす(令埋)うづもらすなり　うながす(促)

おろす(下)　おほす(思)

おはします(坐)　おこす(落)　おす(壓)

おこす(起)　おごす(威嚇)　おす(押)

おびやかす(劫)　おくらす(令後)　おもほしめす(思召)

からす(令枯)　かはす(替)　かはかす(乾)　かざす(頭挿)髪にさすにも又高くさし上ぐるにもいふ

かへす(返)　かくす(隱)　かよはす(令通)　かす(貸)

きざす(萌)　きこす(聞)きやす(消)けす又きえしむのこと意なり　きこしめす(聞召)き、玉ふ、のみ玉ふ、をさめ玉ふなどの意に用ゐる

くづす(崩)　くらす(暮)　くだす(下)　くろます(令黑)

くたす(腐)くさらすことなり

けがす(穢)　けす(消)
こらす(懲)　こがす(焦)
こぼす(覆)　こゝろざす(志)
さらす(晒)　さがす(探)
さます(醒)　さとす(諭)
しるす(記)　しめす(示)　しろしめす(知召)(知りたまふ、をさめたまふ、しめたまふ也)　さぶらはす(令侍)　さす(挿)
すます(清)　すかす(賺)(ひまを窺ひてあざむき誘ふなり)　すます(濟)　すぐす(過)
ろゝのかす(唆)(いざなひ動かすなり)
たらはす(令足)　たゞす(糺)　たゞよはす(令漂)　たゞらす(令爛)
たまはす(令賜)　たふす(倒)　ためす(試)

ちらす(令散)
つひやす(費)　つかはす(遣)　つぶす(潰)　つくす(盡)
てらはす(衒)(ほこりがに示すことなり)　てらす(照)
こほす(通)　こざす(鎖)　ともす(燈)　こゞろかす(令轟)
ならす(平)　ながす(流)　ならす(鳴)　なびかす(令靡)
ならす(馴)　なやます(令惱)　なす(爲)　なほす(直)
なす(産)(この外、鳴、棄、の如しなどの意にもなすといふ言詞を用ゐるけれども古言である)
にほはす(令匂)　にがす(逃)
ぬらす(濡)
ねだます(令妬)　ねさす(根刺)(れをさす、れをかたむの意に用ゐる)

のばす(延)　のこす(殘)
はやす(囃)　はづす(外)
はなす(放)　はしらす(令走)
ひゞかす(令響)　ひたす(浸)
ふるす(古)(ふるくなすの古言なり)　ふす(臥)
ほごこす(施)　ほす(干)
まよはす(令迷)　ます(增)
まはす(廻)　ましま す(坐)
みうなはす(覽)(見玉なり)　みめぐらす(見巡)(こなたを見かなたを見るなり)
むす(蒸)(父産、咽ぶの意にもいふ)

はらす(晴)　はたす(果)
はたらかす(令活)
ひたす(養)(これは古言なれども養ひたすと熟語でつかふ國學者がめるからこゝに書いておくのである)
ふらす(令降)
ほろぼす(亡)　ほころばす(令綻)
まぎらはす(令紛)　まごはす(令惑)
まろばす(轉)　まをす(申)

めぐらす(廻)　めす(召)
もてなす(饗)　もごす(戻)
やごす(宿)　やつす(窶)(姿をかへてやつれしむるなり又反對になまめかしくするなりやはらかにふこゝにもいふ)
ゆるす(免)
よさす(任)(まかすことの古言なり)　わたす(渡)
わかす(涌)
ゑはす(令醉)
をす(食)(召、飲、着、爲の意にも用ゐる)

多行

あやまつ(過)

もよほす(催)　もらす(漏)
わなゝかす(令慄)

うがつ(穿)　うつ(打)
かこつ(托)なげくことにもいふ　かつ(勝)
けつ(消)
こぼつ(壊)
うだつ(育)
たもつ(保)　たつ(立)　たぎつ(滾)わき上るごとくなり　たつ(断)
はなつ(放)
ひたつ(日立)　ひとりごつ(獨言)　ヒヅ(浸)水につかるごとくなり
へだつ(隔)
まつりごつ(政)　まつ(待)

みつ(満)
もつ(持)　モミヅ(紅葉)木の葉が秋になりて赤く色つくをいふ名詞のもみぢはこれより來りしなり
わかつ(分)

波行

あらそふ(爭)　あへしらふ(應答)　あたふ(與)　あゆつらふ(論)
あひしらふ(應接)　あたふ(能)　あきなふ(商)　あらがふ(爭)
あたなふ(仇)　あざわらふ(冷笑)　あつかふ(扱)　あらふ(洗)
アハレブ(憐)　アソブ(遊)
いこふ(厭)　いこふ(憩)　いはふ(祝)　いふ(云)
いらふ(取息)物をかしてその利息をとるなり　いざなふ(誘)　いさかふ(爭)

うべおふ(諾)　うたがふ(疑)
うらおふ(占)　うやまふ(敬)
うつろふ(移)　うたふ(謡)
おぎなふ(補)　おそふ(襲)
おこなふ(行)　おふ(負)
オヨブ(及)　オブ(帯)
かなふ(叶)　かふ(養)
かよふ(通)　かこふ(圍)
きほふ(競)　きうふ(同上)
くらふ(喰)　くふ(食)

うかゞふ(窺)　うるふ(潤)
うばふ(奪)　うしなふ(失)
ウカブ(浮)
おふ(追)　おほふ(覆)
おこなふ(言信)　おもふ(思)

かたらふ(語)　かふ(買)
かゝづらふ(懸)かゝりわふ又たづさはるの意なり
きらふ(嫌)
くるふ(狂)

こふ(乞)　ころふ(嗔)しかることなり　コロブ(轉)
さまよふ(吟)　さかふ(逆)　さむらふ(侍)　さそふ(誘)
さすらふ(流離)そこさらなく漂ひありくなり又摩る意にも用ゐる　サケブ(叫)
しつらふ(修理)　したふ(慕)　したがふ(順)　シナブ(萎)
シノブ(忍)
すまふ(住)　すふ(吸)　すまふ(爭)こばむ又いたむ意にもなる　すくふ(救)
そこなふ(傷)　そふ(添)　うろふ(擒)
たがふ(違)　タブ(給)
ちがふ(違)
つみなふ(刑)罪に行ふことなり　つがふ(番)　つとふ(集)　つかふ(遣)

つたふ(傳)　つくなふ(償)　つくろふ(繕)

てらふ(衒)

とぶらふ(訪)　とふ(問)　ともなふ(伴)　とゝのふ(調)

とこふ(咀)祈りて禍ひを與へんとするなり　トブ(飛)

ならふ(習)　なずらふ(準)　ナラブ(並)

になふ(擔)　にぎはふ(賑)　にほふ(匂)

ぬふ(縫)

ねぎらふ(勞)　ねがふ(願)　ねらふ(狙)目をつけてうかゞふ意なり

のたまふ(宣)　のごふ(拭)　のろふ(呪咀)とこふに同じ

はらふ(拂)　はふ(這)　はぢらふ(耻)　はからふ(計)

ハコブ(運)

ひろふ(拾)

ふるふ(振、篩)　ふさふ(良)これかれ能くかなふことなり　ふるまふ(起居)人に酒肴など與ふることにも用ゐる

へつらふ(諂)

まよふ(迷)　まどふ(惑)　まじなふ(禁厭)　まひなふ(賂)

まとふ(纏)　まかなふ(賄)　まじらふ(交)　まがふ(紛)

まつろふ(服順)從はしむの意なり　まふ(舞)　マネブ(學)眞似の意にも用ゐる　マロブ(轉)

マナブ(學)

むかふ(向)　ムセブ(咽)　ムスブ(結)

もらふ(貰)

やこふ(雇)　やしなふ(養)
ゆふ(結)　ユルブ(弛)
よろぼふ(弱)よろしくすることなりよそふ(粧)
ヨロコブ(悦)　ヨブ(呼)
わらふ(笑)　わづらふ(煩)
ゑふ(酔)

麻行

あからむ(赤)　あさむ(驚)思ひの外に逼ひだるをいふあゆむ(歩)
あをむ(青)　あやぶむ(危)
あかむ(赤)　あむ(編)

やらふ(逐)　やすらふ(休)
よばふ(呼)　よろふ(具)
あはれむ(憐)
あやしむ(怪)

いこなむ(營)　いたむ(痛)
いばむ(聚)　いどむ(挑)
いむ(忌)
うれしむ(嬉)　うつくしむ(慈)
うこむ(踈)　うむ(産)
うらやむ(羨)　うむ(倦)
れひばむ(老)
かすむ(霞)　かゞむ(屈)
かしこむ(畏)　かこむ(圍)
きばむ(黄)　きざむ(刻)

いこほしむ(勞)　いそしむ(功)動むは或はいたづくなり
いつくしむ(愛)　いさむ(勇)
うむ(績)　うるはしむ(麗)
うべなむ(諾)　うづむ(埋)
うむ(膿)身躰の腫物よりうみの出ることをいふ
かなしむ(悲)　かむ(嚙)

くろむ(黒)　くむ(組)
くぼむ(窪)　くやむ(悔)
このむ(好)　こむ(込)
さしくむ(差組)　さいなむ(呵嘖)叱るなり
しらむ(白)　しむ(染)
しわむ(皺)　しづむ(沈)
すゝむ(進)　すむ(濟)
すむ(清)
そねむ(妬)　うむ(染)
たわむ(撓)　たゝむ(疊)

くるしむ(苦)　くむ(汲)
くゝむ(含)
しぼむ(萎)　しがらむ(柵)せきさむるなり
しゞかむ(縮)
すさむ(荒)進みゆく又あれゆくなり又もてあそぶ意にも用ゐるなり　すゞむ(涼)
たゆむ(弛)　たばさむ(手挟)

たゞずむ(イ)　たのしむ(樂)
たしなむ(嗜)
ちゞむ(縮)
つぼむ(蕾)　つむ(摘)
つゝしむ(愼)　つかむ(攫)
とよむ(響)なりひゞくことなり　とむ(富)
なやむ(惱)　なごむ(和)やはらがしむるなり　なづむ(泥)
なぐさむ(慰)
にばむ(鈍)　にくむ(憎)
ぬすむ(盗)

たくむ(巧)　たのむ(頼)
つぼむ(蕾、莟)　つむ(積)
にらむ(睨)　ならばむ(萎)

ねたむ(妬)

のむ(祈)いのる又こひねがふの古言なり　のむ(飲)　のぞむ(望)

はさむ(夾)　はむ(食)　はげむ(勵)　ぐゝむ(養育)愛育の意にもいふ

ひろむ(潜)　ひがむ(僻)ゆがむ、ねぢく又ふさあやまる意に用ゐる　ひるむ(痺)

ふむ(踏)

むしばむ(蟲食)

もむ(揉)

やむ(止)　やむ(病)　やすむ(休)

ゆるむ(緩)　ゆがむ(曲)

よごむ(淀)　よむ(讀)

ゑむ(微笑)

をしむ(惜)　をがむ(拜)　をろがむ(拜)

良行

あらたまる(改)　あぶる(炙)　あざける(嘲)　あやまる(誤)

あなづる(輕蔑)　あたる(當)　あまる(餘)　あつまる(集)

あがる(上)　あやかる(肖)　あたゝまる(暖)　あさる(求食)尋ね求む、すなどりす、又食物を求め歩りく意

いのる(祈)　いかる(怒)　いつはる(僞)　いきごほる(憤)

いろどる(彩)　いたはる(勞)　いる(入)　いたる(至)

いる(煎)　いる(要用)

うけばる(受張)おしばることなり　うる(賣)　うづくまる(蹲)

おほはる(覆)　おごる(奢)　おる(織)　おとる(劣)

おこる(燃)怒ることにもいふ　おくる(贈)　おもねる(諂)　おこたる(怠)

おくまる(奥)　おろる(懼)　おこる(起)

かへる(歸)　かたまる(固)　かげる(陰)かげいでゝくもるなり　かぎる(限)

かる(借)　かをる(薫)　かたる(語)　かざる(飾)

かゞまる(屈)　かなぐる(搔拂)はらひのくなり　かさなる(重)　かぶる(被)

かゝる(懸)　かはる(代)　かしこまる(畏)　かける(翔)

かる(苅)　かる(獵)

きたる(來)　きる(切)

くゆる(薫)　くはゝる(加)　くさる(腐)　くる(鑿)

百五十二

くらがる(闇)　くばる(配)　くだる(下)　くる(繰)

くびる(縊)　くねる(屈曲)ゆがみまがる、すれかこつ、又うらみかこつ意なり　くゝる(絞)　くもる(曇)

くつがへる(覆)　くゞる(潜)

けづる(削)

こほる(氷)　こる(樵)木をきることなり　こもる(籠)　こる(凝)

ことわる(判)筋道を說きて善惡をわかつこと又いなと言ひていなむことにも用ゐる　こぞる(擧)

さへづる(囀)　さだまる(定)　さる(去)　さやる(障)さはることなり

さかる(離)　さかのぼる(溯)　さづかる(授)　さぐる(探)

さとる(悟)　さがる(下)

しかる(叱)　しぼる(絞)　しる(知)　しをる(呵嘖)責む萎る又栞すの意

百五十三

しばる(縛)　しきる(頻)
しめる(濕)　しげる(茂)
うしる(譏)　うる(剃)
うまる(染)
たよる(便)　たゝる(祟)
たすかる(助)　たる(垂)
たばかる(計)　たぎる(沸)
ちぎる(契)　ちる(散)
つのる(募)　つくる(作)
つらなる(連)　つゞまる(約)

しまる(緊)　したゝる(滴)
すねる(屈曲)すねかこつ意なり
うはる(添)　うる(反)
たる(足)　たまる(溜)
たごる(尋)　たぐる(手繰)
ちぎる(切)手にてもぎとるなり
つもる(積)　つる(釣)
つゞる(綴)

てる(照)
となる(隣)　とる(取)
とゞこほる(滞)
なじる(詰)　なる(成)
なまる(訛)　なぶる(嬲)
にぶる(鈍)　にぎる(握)
ぬる(塗)
ねぶる(舐)　ねる(煉)
のばゝる(延)　のこる(殘)
のどまる(寛)やはらぐ又おちつく意なり　のる(乘)

とまる(留)　とほる(通)
なほる(直)　なる(鳴)
なのる(名告)
にくがる(惡)　にごる(濁)
ねむる(睡眠)
のぼる(登)　のる(罵)
のゝしる(罵)　のる(告)

はゝかる(憚)　はなる(離)

はしる(走)　はかる(計)

はひる(這入)　はたる(促)(せめてうながす意なり)

ひねる(撚)　ひかる(光)

ひたる(浸)

ふける(耽)　ふる(降)

ふる(振)

ほごぱしる(迸)　ほる(欲)

ほろる(細)　ほこる(誇)

まはる(廻)　まさる(勝)

はる(張)　はぶかる(省)

はやる(早)　はびこる(蔓)

はじまる(始)

ひろごる(蔓延)　ひろまる(弘)

ふすぶる(燻)　ふたがる(塞)

ほふる(屠)　ほる(堀)

まもる(守)　まかる(罷)

まるる(參)　まじはる(交)

みのる(實)　みだる(亂)

むづかる(憤)　むさぼる(貪)

もる(守)　もる(洩)

もる(盛)

やすまる(休)　やる(遣)

やる(破)

ゆする(揺)　ゆづる(譲)

よこぎる(横斷)　よる(寄)

よぎる(過)

まじる(混)

もごる(戻)　もぢる(捩)

やぶる(破)　やどる(宿)

ゆる(揺)　ゆるす(強請)

よわる(弱)　よこなまる(訛)(ふまるさいふに同じ)

わしる(趨)　わる(破)　わだがまる(蟠)　わたる(渡)

わかる(分)

をはる(終)　をる(折)　をごる(躍)

伊段活の部

伊段活加行　加行

きる(着)

伊段奈行　奈行

にる(似)　にる(煑)

伊段波行　波行

ひる(皺)箕などを以て扇ぐやうにしてふるふなり　ひる(干)　ひる(嚏)くさめするこさなり

伊段麻行　麻行

みる(見)

伊段也行　也行

いる(鑄)　いる(射)

伊段和行　和行

ひきゐる(率)

もちゐる(用)この假名を或る人は波行二段で用ひ用ふなりさもいへど和行一段にした方が古へよりの例が澤山あるやうである

ゐる(率)　ゐる(居)

衣段活の部

衣段活加行　加行

ける(蹴)

伊宇段活の部

この外又おほぜる(貧、課、仰、謀)かこつけるなどある地方には澤山此の段につかふ又近來(綜る)(殆る)をこの活用さするものもある

伊宇段加行

加　行

いくる(活)

おくる(起)

スグル(過)

つくる(盡)

ナグル(和)

よくる(避)

わくる(分)

左　行

伊宇段左行

コヅル(掘)

伊宇段多行

多　行

おつる(落)　オヅル(怯)

くつる(朽)

トヅル(閉)

ヲヅル(恰)

ハヅル(耻)

ヒヅル(浸)

モミヅル(紅葉)

ヨヅル(攀)

波行

伊宇段波行

アカラブル(赤)　アヲブル(荒)

ウトブル(踈)

おふる(生)　オトナブル(長)

こふる(戀)　コブル(媚)

しふる(強)　しふる(盲聾)

スヽブル(煤)

タケブル(猛)

ノブル(延)　オラブル(叫)大聲に呼ぶことなり

シノブル(忍)

ホロブル(亡)　ホコロブル(綻)

ムツブル(睦)

ワブル(詫)

オサナブル(幼)

廠行

伊宇段廠行

うらむる(恨)　うしろむる(後見)うしろより助くるなり

こゝろむる(試)

也行

おゆる(老)

くゆる(悔)

こゆる(臥)臥するこゝの古言なり

むくゆる(報)

良行

伊宇段良行

おる〳〵(下)

こる〳〵(懲)

ふる〳〵(舊)

衣宇段活の部

阿行

衣宇段阿行

うる(得)

こゝろうる(心得)

加行

衣宇段加行

あづくる(預)　あくる(明)

いくる(活)

うくる(浮)　うくる(受)

おもむくる(赴)

かくる(懸)　カヽグル(掲)

くだくる(砕)

さづくる(授)　さくる(避)

サグル(提)　サグル(下)

しりぞくる(退)　しらくる(白)

あらくる(散)　アグル(擧)

サヽグル(捧)　サマタグル(妨)

シラグル(精)

スヽグル(煤氣)
うむくる(背)
たはくる(奸)道に背きたる遊びなどするに用ゐる　たくる(闌)
タヒラグル(平)
つゞくる(續)　つくる(附)
とくる(解)　トグル(遂)
なづくる(號)　ナグル(投)
ニグル(逃)
ぬくる(拔)
ねじくる(俟)

たむくる(手向)　たすくる(助)
ツグル(告)

のくる(退)
ハグル(禿)　ハグル(剝)
ひしくる(拉)　ひらくる(開)
ふくる(更)　ふくる(膨脹)
ほどくる(解)
まうくる(設)　まくる(貢)
むくる(剝)　むくる(向)
やくる(燒)　ヤハラグル(和)
よくる(避)
わくる(分)

ヒログル(廣)
マグル(曲)

衣宇段左行

左行

あはする(逢)　あする(淺)あさくなる又さめて湯くなること

いまする(坐)

うする(失)

おほする(仰)

きかする(聞)　きする(着)

くはする(令食)

しらする(知)

たわまする(令撓)

とらする(令取)

ならはする(習)

にほはする(令匂)　にする(令似)

のする(載)

はしらする(令馳)　はする(馳)

ふする(臥)かくしておくことにもふすといふ

まかする(任)　まゐらする(參)　マズル(交)

むする(咽)

やする(瘦)

よする(寄)

多行

あわつる(周章)　あつる(當)
イヅル(出)
くはだつる(企)
すつる(捨)
うだつる(育)
たつる(立)
ナヅル(撫)
セイヅル(秀)
へだつる(隔)
マヰヅル(詣)

奈行

いぬる(寢)
かさぬる(重)　かぬる(兼)
たづぬる(尋)　たがぬる(束)
つらぬる(連)　つかぬる(束)
ぬる(寢)　ぬる(濡)髮などのぬるゝ自らさ
はぬる(刎、撥、跳)　くるこさをもぬるさいふ
ゆだぬる(委)
わがぬる(束)凡くたわめなすなり

波行

あがまふる(崇)　あふる(合)
あふる(敢)たふこたふしひてなす意などに用ゐる　あつらふる(誂)　あたふる(與)
うらふる(卜)　うたふる(訴)
おどろふる(衰)　おさふる(押)
かぞふる(算)　かふる(換)
かむがふる(考)　かまふる(搆)
くはふる(加)　クラブル(比)
こたふる(答)　こしらふる(拵)
さゝふる(支)　さきはふる(幸)
したがふる(随)　シラブル(調)

かなふる(叶)　かずまふる(敷)
かずふる(數)　かぞふる(數)
クブル(燃)

スブル(總)
うろふる(揃)　うふる(添)
たふる(堪)　たまふる(給)
だゝふる(洩)　たがふる(違)
タブル(食)
ちがふる(違)
つゞふる(集)　つかふる(仕)
づなふる(唱)　こらふる(捕)
なずらふる(擬)　ながらふる(存生)　なろらふる(准)　ナラブル(亜)
ナブル(亜)

たくはふる(貯)　たゞふる(譬)
たづさふる(携)　たゝうる(稱)賞めそやすことなり

ノブル(延)
はらふる(禊)神に祈りて禍を除くことなり　はふる(延)
ひかふる(扣)
ふる(歴)
まがふる(紛)
まじふる(交)
むかふる(迎)
ユルブル(緩)
よこたふる(横)
わきまふる(辨)

衣宇段麻行

をふる(終)

麻行

あはむる(疎)うとむ又にくむ意なり　あがむる(祟)　あらたむる(改)　あかむる(赤)
あたゝむる(暖)　あきらむる(明)
いましむる(誡)　いさむる(諫)
うかむる(泛)
かたむる(固)　からむる(縛)　かすむる(掠)
きよむる(清)　きはむる(極)
くるしむる(令苦)
こむる(籠)

さだむる(定)　さむる(醒)
しむる(閉)　しむる(占)
しづむる(沈)　しゞむる(縮)
すゝむる(進)
せむる(責)
ろむる(初)　ろばむる(側)かたよる、傍より見る、蹴み怨むなどの意　うむる(染)
たゆむる(弛)　たゆむ(撓)　しづむる(鎭)　したゝむる(認)
たのむる(憑)　たしなむる(責)　たわむる(撓)　たむる(溜)
ちりばむる(鏤)
つとむる(勤)

ごゝむる(止)　こぢむる(極)をはらしむ　こむる(留)　こがむる(咎)
なぐさむる(慰)　なむる(嘗)　なやむる(惱)　ながむる(詠)
なだむる(宥)
はじむる(始)　はむる(食)　はやむる(早)
ひろむる(潜)　ひがむる(僻)　ひろむる(弘)
ふかむる(深)
ほむる(譽)
もこむる(求)
やすむる(休)　やむる(止)
ゆがむる(勾)

をさむる(治)

也行

あゆる(肖)　あゆる(落)

いゆる(愈)

おばゆる(覺)　おびゆる(魘)

きこゆる(聞)　きゆる(消)

こゆる(肥)　こゆる(越)

さかゆる(榮)

うびゆる(聳)

たゆる(絕)

あゆる(滴)

おもほむる(思)

はゆる(生)

ひゆる(冷)

ふゆる(殖)

ほゆる(吼)

まみゆる(見)

みゆる(見)

もゆる(萌)　もゆる(燃)

良行

あふるゝ(溢)　あるゝ(荒)

いるゝ(入)

あらはる(顯)　あきるゝ(呆)

うづもる〳〵(埋)　うかる〳〵(浮)　うまる〳〵(生)

おこづる〳〵(音便)　たくる〳〵(蕩)心そらになるうもる〳〵(埋)　おぼる〳〵(溺)　おうる〳〵(恐)

かくる〳〵(隠)　かる〳〵(枯)　おぼる〳〵(後)

きる〳〵(切)

くる〳〵(吳)人の我に與るなり　〳〵る〳〵(暮)　くさる〳〵(腐)　くづる〳〵(崩)

けがる〳〵(穢)

こぼる〳〵(零)　こぼたる〳〵(破壊)　こがる〳〵(焦)

しぐる〳〵(時雨)　しる〳〵(知)　しくる(窪)顔のしかめたる樣に見ゆるにもいふ

すたるゝ(廢)　すぐる、(勝)

たはふるゝ(戯)　たるゝ(垂)　たふるゝ(倒)　たゞるゝ(爛)

つぶる〳〵(潰)　つかる〳〵(労)

ながる〳〵(流)　なる〳〵(馴)

ぬる〳〵(濡)

のがる〳〵(遁)

はる〳〵(腫)　はる〳〵(晴)　はなる〳〵(離)

ふくる〳〵(膨脹)　ふる〳〵(觸)

ほる〳〵(惚)　ほる〳〵(堀)

まぎる〳〵(紛)

みだる〳〵(亂)

むすぼる〳〵(結)心晴やかにならぬこゝちにもいふ

もるゝ(洩)

やつるゝ(勞)　やるゝ(破)

わかるゝ(別)　わするゝ(忘)

をるゝ(折)

和行

うゝる(植)　うゝる(飢)

すうる(居)

變格活の部

加行

くる(來)

佐行

おはする(坐)

する(爲)

奈行

いぬる(去)

しぬる(死)

良行

あり(有)

はべり(侍)

をり(居)

右の處々解釋してあるのは物集高見翁の日本大辭林に依つたのである

國語形容詞の變形

形容詞も、亦、其の用ゐ方に依つて、其の言葉の形を、變ずるものである。之を音雜活と いふ。音雜活と言ふ譯は、形容詞のは、動詞の樣に、五十音の、一行內ばかりに、變化しな いで、加行の三列と、左行の一列とに、音が雜つて、變化するからである。即ち左の如し。

	善	
	加行	左行
阿列	○	
伊列	き	し
宇列	く	○
衣列	け	○
於列	○	○

注意一　從來の文法家は、この活用を、左の如く、二つに分けた。

	久活		志久活	
	善		嬉	
	加行	左行	加行	左行
阿列	○	○	○	○
伊列	き	し	しき	し
宇列	く	○	しく	○
衣列	け	○	しけ	○
於列	○	○	○	○

ろの理由とする所は「善し、赤しなどは、第一例に從ふけれど、嬉し優しなどを、第一例に當て嵌むれば、嬉しゝ、優しゝなど言はねばならぬ、然るに嬉し優しなど言ふが故に、この第二例にせねばならぬ。」と、けれども、これは、矢張嬉しゝ、優しゝなどが、元來の言葉であるのを、同音重複略音の道理に依つて、自然と省かれたものである、其の證據は、古人の歌にも、はけしゝやさしゝなど、詠んだのがある。若しも、便宜のために、分くるならば、久活・志久活といふ名稱を廢して、單音雜活・複音雜活とでも、改めた方が、宜からうと思ふ。

注意二　形容詞の大方は、この音雜活に從ふけれど、或る形容詞は、これに從はぬといふことを、忘れてはならぬ。例へば、渺茫たる海、高尙なる心などの、渺茫たる高尙なるは、漢語とたるなるが合して、又一つの形容詞となつてゐる樣なものである。尙、詳しく後に說かう。

前の良行變格の章で、一寸述べた通り、この音雜活くの處から、良行變格のありに連合して、善くあらん善くありなどいふを、ろのくあが約つて、善からん善かりなど、活用するのがある。尙、圖を以て示さう。

善　く
惡くし　あ……有
　　か……約
　　ら　り　る　れ

これを更に、正圖に改むれば、左の如し。

善　から　かり　かる　かれ
惡し　から　かり　かる　かれ

右にて、形容詞の形を、變化することを、述べたに依つて、動詞活例の例に從ひ、左に、音雜活例を出して置かう。

音雜活例

あかし(赤)　あをし(青)
あつし(熱)　あつけし(同上)
いちじるし(著)　うれたし(憂)
おそし(晩)　おもし(重)
かたし(堅)　かたし(難)
くろし(黑)　けやけし(異やうなり、すぐれたりなどの意である)
さむし(寒)　さむけし(同上)
しげし(繁)　しろし(白)
すし(酸)　すみやけし(速)

あさし(淺)　あまし(甘)
あきらけし(明)　うすし(薄)
うしろめたし(後護)　かろし(輕)
からし(辛)　しづけし(靜)
せまし(狹)

たかし(高)　たひらけし(平)
ちかし(近)　つよし(強)
つゆけし(露)　とほし(遠)
ながし(長)　にがし(苦)
ねたし(妬)　ねぶたし(眠)
のどけし(長閑)　はるけし(遙)
はやし(早)　ひくし(低)
ひろし(廣)

つめたし(冷)